

2019 年度

人間と社会の理解Ⅱ

伊藤クラス活動報告書



長野大学 社会福祉学部

はじめに

本活動報告書は、後期「人間と社会の理解Ⅱ」伊藤クラスの活動概要、活動を通しての学びについて編集したものです。本活動報告書の編集にあたり、伊藤英一教授及び伊藤クラスの皆様から貴重なアドバイスをいただきましたことを記し、心から感謝の意を表します。(報告会担当グループ)

目次

はじめに	i
目次	ii
1 「地域活動」担当グループ活動報告	1
1.1 F19019 今須さくら	2
1.2 F19022 岩田真佳	4
1.3 F19033 奥原一貴	6
2 「記録」担当グループ活動報告	9
2.1 F19025 白田綾乃	10
2.2 F19026 内海遥	12
2.3 F19056 小林健人	14
3 「無言館」担当グループ活動報告	17
3.1 F19042 金本京子	18
3.2 F19046 草場美侑里	20
3.3 F19073 佐藤輝	22
4 「報告会」担当グループ活動報告	25
4.1 F19053 鯉沼舞帆	26
4.2 F19067 酒井佑捺	28
4.3 F19101 中村誠	30
5 「ベルポート丸子」担当グループ活動報告	33
5.1 F19079 鷹羽里奈	34
5.2 F19087 谷口宝穂	36
5.3 F19123 細木辰哉	38
6 「進行」担当グループ活動報告	41

6.1 F19091	長井暖果	42
6.2 F19100	中村あい	44
6.3 F19139	村田広洋	46
7	「企画」担当グループ活動報告	49
7.1 F19108	野川佳乃	50
7.2 F19133	宮坂つぐみ	52
7.3 F19145	吉田有咲	54
8	伊藤クラス活動内容（写真集）	57
	編集後記	??

【編集後記】

- ◇ 私達伊藤ゼミの活動をまとめた活動報告書の作成に携わる事が出来、大変ではあったが完成させる事が出来て良かったです。 酒井佑捺
- ◇ 活動報告書が完成しました！私たちの半年間の活動がしっかりと伝わるものになっていると思います。 鯉沼舞帆
- ◇ この報告書が一人でも多くの人目に触れることを願います。そして読んでいただいた方に対し感謝申し上げます。 中村誠

2019年度 人間と社会の理解（伊藤クラス）

グループ活動報告

「地域活動」担当

F19019 今須さくら

F19022 岩田真佳

F19033 奥原一貴

1. グループ活動の概要

・事前準備

私たちの班は、先生に助言をいただきながら、「楽しく活動する」ということをテーマに、活動内容を決めていった。話し合いの結果、上田市を散策しつつ、障害を持っている方がどうやったら楽しく観光できるのかということ調べるために、実際に障害者の目線になって体験するという活動を考えた。そこから散策に行く場所、役割、体験する障害を決めた。

散策に行く場所は、上田城と別所温泉に決めた。役割は、各グループ内で、実際に体験する体験者、観光スポットを説明してもらうガイド、体験者の声、体験者とガイドの様子を記録する観察者に分けた。体験する障害は、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害にした。

事前学習では、体験する障害について調べてもらい、それをみんなで共有してもらった。そして次に上田城と別所温泉に行く班で分かれてもらい、それぞれの場所について知ってもらった。次に、体験者、ガイド、観察者に分かれてもらい、それぞれの役割を説明した。最後、班で情報を共有してもらった。

・役割分担

奥原は地域活動の時間内の司会・進行係と、体験者、別所温泉の係、岩田は先生や先方、ゼミのメンバーとの連絡調整と、観察者、別所温泉の係、今須はプリント、パワポ作成と、ガイド、上田城の係を担当することにした。また、

地域活動当日は、三人が活動の様子を写真撮影した。

・活動当日 12/4

上田城へ行く班はマイクロバスで、別所温泉に行く班は電車で移動し、それぞれ活動を始めた。体験者は肢体不自由、視覚障害、聴覚障害を体験するために、車椅子やゴーグル、イヤホンを使用し、実際に障害を体験してもらい、感じたことやガイドへの要望を声にだしてもらった。ガイドは観光スポットの説明を工夫して行ったり、体験者のサポートをしてもらったりした。観察者は、体験者が言ったことや、体験者とガイドの様子を観察し、記入してもらった。

活動後、それぞれの班でまとめてもらい発表をしてもらった。また、上田城と別所温泉に分かれて意見を共有してもらったり、体験者、ガイド、観察者に分かれて意見を共有してもらったりした。

・考察

活動実施後、感想を班ごと発表してもらったり、レポートに書いてもらったりした。感想の中では、「視覚障害を持っている方は、トンネルや影などの暗闇に恐怖を感じることもある。」

「自動車や自転車の音に気づかず、自分の横を通り過ぎるまで、接近していることに気づかなかったから、怖かった」「車椅子に乗っていると、顔パネルに顔をはめることができない。砂利道には入れない。」「意外なところにスロープがあったり、立て札があったりした。」など、障

害を実際に体験したから、近くで見たからこそ、気づいたことが多くあった。また、聴覚障害の方は、聞こえない分視覚が敏感になるから、人一倍景色を楽しむことができる、視覚障害の方は目が見えない分、とても音に敏感になるから、自然の音を楽しんでいたなどの意見も多くあり、障害があるからこそ楽しめることがあるということにも気づくことができた。お互いがうまく共存するためには、お互いのことを理解しあい、補い合うこと、尊重しあうことが大切である。

2. F19019 今須さくら

2-1 グループ内の役割

プリント・パワポ作成、別所温泉と上田城の下見、上田城のルート作成、ガイドの説明や補助、上田城班の誘導・写真撮影の役割を担当した。

プリント・パワポ作成では、ゼミで配布する資料や、発表する内容をグループで話し合い、その内容をまとめ、配布する資料やパワポを作成した。別所温泉と上田城の下見では、別所温泉と上田城に実際に行き、コースや説明してもらいたい観光スポットを決めたり、別所温泉や上田城の資料を集めたりした。また、ルートを決めた後、上田城でいただいたマップに、ルートを記入した。さらに体験者、ガイド、観察者の役割のうち、ガイドを担当した。事前準備では、活動する際にガイドにしてほしいことを説明したり、観光スポットの説明などをしたりした。活動当日は、上田城に行き、指示・誘導を行ったり、活動している様子の写真撮影を行ったりした。

2-2 グループ活動を通して

私はグループ活動を通して、周りの人との協力・連携の大切さについて学んだ。

今回の地域活動では、自分たちが一からどんな活動をするのかということを決めたため、グループ内での思い違いが多く起こった。こういうことだと思っていたなど、三人の中で考えが一致しておらず、最後まで慌ただしく活動してしまった。私たちのグループでは、役割分担したものの、個々が自分の役割だけに集中してしまったため、三人の連携がうまくとれていなかった。活動が終わり、振り返ってみると、もっと連携を取っていたらスムーズに進めることができたのではないかなと思う。自分の役割に没頭しすぎず、もっとお互いがお互いを頼りあえば、うまくまとまることができたのではと思う。

しかし、その反面、役割分担をしたことによって、自分の苦手とすることを他の二人のメンバーが補ってくれた。私は人前で話すことが苦手である。二人はそれを受け入れてくれ、二人が中心となって話をしてくれた。そして、ただみんなの前でしゃべるだけでなく、私に人前で話すチャンスを与えてくれた。

今回、役割分担をして活動に臨んだことによって、私は周りの人との協力・連携の大切さを学んだ。三人で意見がまとまらなかったり、慌ただしくなってしまうたりしたが、そこから協力・連携について学ぶことができ、さらに、お互いの苦手を補い合うことができたので、とてもいい経験になった。これから福祉職に就いても就かなくても、周りの人との協力・連携は社会人として必要となってくるので、今回学んだことを、これから生かしていきたい。

2-3 半年間の学びの概要

この半年間のゼミ活動では、座学だけでなく実際に体験する機会が多くあった。国際福祉機器展見学では、数多くの福祉機器が展示されている中で、自分が知りたいと思う福祉機器について調べた。私は、障害を持っている方、高齢者の方の中で自立した生活を送りたいという願いを実現させてあげたいという思いを持っている。そこで、「ADL 向上自助具スプーン」について調べた。今まで、自分からこれを調べてみたい、これについて詳しく知りたいという気持ちが薄かった。しかし、国際福祉機器展を見学して、自分からこれを知りたい、学びたいという姿勢の大切さを学び、以前より自分の気持ちを強く持つことができた。

特別養護老人ホーム（ベルポートまるこ）では、実際に利用者の方と関わった。一回目の訪問では、リビングに出てきてくれた方、1人ひとりをよく観察したり、会話する中で好きなこと得意なことを聞き出したりして、可能なこと、不可能なことを探した。二回目の訪問で行う企画の事前準備では、一回目の訪問で得た情報をもとに、どんな企画を行うかを決めた。私たちのグループが訪れたユニットでは、片麻痺の方、耳が遠い方、声を発することが困難な方が多く見られた。なので、目で見て楽しむことができるような企画、ビンゴを企画した。二回目の訪問では、実際に自分たちが考えた企画を施設の職員の方にも協力していただき行った。自分たちで考え、企画し行ったことで、達成感を味わえた。また、このベルポートまるこでの実習を通して、まずは自分たちが楽しむことが大切だということを学んだ。内容が楽しいことはもちろん大切だが、自分が楽しむことで相手がそれを感じ取ってくれる、相手がそういう感情

に敏感であるということを学んだ。

この半年間では、実際に体験したからこそ学べたことが多くあり、それをまた座学で学ぶことによって、より理解することができ、身に付けることができた。

2-4 半年間の学びの感想

私はこの半年間で、実際に体験することの大切さを学んだ。この半年間では座学と実際に体験する機会が両方あったため、より理解し、身に付けることができた。今後、私は、幼児や、高齢者、障害者など、困っている方を幅広く支援していけるようになりたいと思っている。そのために、座学にしっかりと取り組むことはもちろん、ボランティアなどに行き、実際に体験することで、より理解を深め、知識を身に付けていきたいと思った。

また、この半年間の講義を受ける中で自分についての理解を深めることができた。人を支援する立場になるためには、まず自分のことを知ることが大切なので、今後、座学と実学を往還した学びを通して、知識を身に付けるとともに、自分についての理解を深めていきたいと思った。

3. F19022 岩田真佳

3-1 グループ内の役割

連絡調整、別所温泉・上田城に行き情報収集、別所温泉班の誘導・写真撮影、観察者の役割説明・補助の役割を担った。

地域活動の内容を伊藤先生の相談するためのアポイントメントをとる、班員で集まる日程を調節する、別所温泉観光協会・信州上田観光協会に地域活動を行う上で許可を頂くための連絡を取る（別所温泉観光協会には電話では許可を取れな

ったためメールで改めて文面に残したことで許可を頂いた、上田観光協会には電話で許可を頂いた)、別所温泉・上田城に実際に行き道順を決める、別所温泉・上田城の資料を集める、車いす・バインダーを社会福祉実習室・教育支援課に借りに行く、大学前駅―別所温泉間の電車の駅を人数分買う、別所温泉班の道順を決めて地図に記し配布する、別所温泉班の現地での誘導・写真撮影を行った。

3-2 グループ活動を通して

地域活動という想像のつかない企画で、活動内容を考える際、全く筋道が決まらず、不安しかなかった。前例が少なかったこともあり、夫々のやりたいこと、考え方が違い、企画を決定するまでが大変だった。しかし先生の助言や話し合いを通して、一番の目的は楽しむことにしようなどと、少しずつ方向性が定まり、そこから私の“私が楽しいことは知らないことを知ること”という考えから、知らない場所に訪れてみようということになり、上田城・別所温泉を散歩してみようという企画に決まった。決まった当初はこれで本当に大丈夫だろうかと思っていたが、先生との話し合いを繰り返しながら、ゼミでの活動としての学びを得ることができるような内容に詰めていくことができた。一番苦労したのは、ゼミのメンバーの前で地域活動の具体的な内容を伝えることだった。先生と直接話をした私や今須や奥原でさえ、みんなの前で話すとなると上手く伝えることができず、言葉選びが難しかった。また切符を購入する際に自分が正しい・あたりまえと判断し行動したことが、実は間違っていたということがあり、自分は大学生ではあるけれども学生ではあるので大人の判断を待つべきだと考えた。考え方や価値観の違いから先生との話し合い・地域活動班内

での集まりの数は、多かったものの、地域活動班全員が“地域活動”をクラス全員が楽しみながら学べるという目的は一致していたこともあり、その分互いの違いを知り、仲を深めることになってよかった。また教育支援課、学生支援課、信州・上田観光協会や別所温泉観光協会という外部の大人と接触する機会もあり、貴重な経験ができた。

3-3 半年間の学びの概要

国際福祉機器展では、展示している数・来場者数に驚いた。そのような企画があることも知らなかった。自分の知らない知識が増えた。事前に自分の調べたいことを選ぶことができたため、行くまでも行った後も楽しむことができた。初回授業では3人夫々の第一希望の役割が違い、選ぶときにこのメンバーで大丈夫かと不安になったものの、地域活動を選べて今となってはとても成長できたと思っている。魂がはっとするような迫力のある絵や西洋人に対する戦争の趣旨など無言館では忘れられない経験になった。絵を描いた方の解説が読みたいと思い、無言館にある本を読んだ。そこでは戦争の悲惨さを改めて再認識でき、今の生活に感謝をすることができた。“寄せては返す波の姿がまるで哀れな自分の運命のよう、自分は生きて帰ってこられるのかしら”という言葉から戦争に向かうものは死ぬ覚悟をもっているのだと感じた。ベルポートまるこではコミュニケーションをとる難しさ、それを踏まえての職員さんの対応力に驚いた。耳が遠い方や、麻痺のある方、手が震えている方、認知症の方がおり過半数の方が話すことが難しい利用者の方で、レクの企画を考えるのに苦労した。見てわかるような、わかりやすいことをしようということでビンゴゲームを選び、職員さんの手助けを借りながら、私自身も利用者の方とともに楽しむことができた。地域

活動では先方とのアポ取りや当日の誘導など、普段経験できないことに取り組むことができ、自分
は人見知りで外部の方と電話をすることなんて
できないと思っていたが、実際できたので自分の
知らない一面が知れたことや、自分が成長できて
本当によかった。

3-4 半年間の学びの感想

最も印象深いのは、別所線の券を買うとき、安
いという理由から自分で判断して回数券を買っ
たが、実は回数券では学校側からお金が下りない
ことを知らず、買い直しのために別所温泉駅の方
に迷惑をかけてしまったという失敗だ。事前に先
生に確認するべきだった。これは福祉と直接関係
があるわけではないが、グループ活動や課外活動
などでは報告・連絡・相談が大切だと実感した。
今須、奥原とともに半年間学ぶ中で、今須は資料
作成を、奥原は司会進行をと、私が苦手とする部
分を補ってくれて、とても感謝している。二人な
しでは地域活動は成功しなかった。半年間を通し
て、事前準備の大切さを実感した。国際福祉機器
展でもベルポート丸子でも地域活動でも、学びを
深くするためにも事前に知識を自分のものにし
て、そこから発展していくと実感した。今後は先
のことを考えて、想像力を働かせて行動しよう
と思う。

4. F19033 奥原一貴

4-1 グループ内の役割

今回のグループ活動で私個人の役割としては、
上田市の観光地に赴き、障害者の状態に近づき観
光地を巡る「体験者」、観光地にある名所の説明や
体験者の補助を担当とする「ガイド」、体験者とガ
イドのやり取りを逐一記録する「観察者」の3つ
で構成されている役割のうち、「体験者」の責任者

を担当した。しかし、事前学習の時間の際、私が
体調を崩してしまい、グループメンバーに任せる
形になってしまい、事前学習に参加、実習当日の
説明を行うことが出来なかった。実習を終え、「体
験者」を担当した学生たちに、自分たちが巡った
観光地のバリアフリーや交通面の安全性はどう
か、学生一人ひとりに発表してもらい、意見交換
を行い、出てきた意見をまとめた。

そのほかの役割としては実習報告会では発表
の準備や司会進行を担当し、報告会が円滑に進む
ように努めたが、事前準備の段階で思うように進
めることができなかった。

4-2 グループ活動を通して

今回のグループの活動を通し、私が学んだこと
は何か。一つは学んだというよりは、印象に残っ
ていることの一つではあるが、地域活動であるか
らこそ「みんなが楽しめるものでなければならな
い」ということだ。これは地域活動では何をす
るかを決める際に伊藤先生に「おまえら、それをや
って楽しいのか」という言葉が印象の根幹にある。
ただただ周辺の場所、近く of 駅、河川のゴミ拾い
をしたとして、地域のためになるだろうが、活動
している人は義務感ときれいになったという達成
感があるだけで、それでは活動する意味も意義
も得られない。地域活動やボランティアは誰かが
助かるかつ、活動にかかわるいろんな人たち全
てが楽しんでもらうからこそ意味があるのだと、今
回の活動を通し学んだ。

また、今回は事前の準備に関するすべての工程
の重要性である。この「すべて」というのは企画
の提案や、先生とのアポ、必要物資の調達などを
指している。準備をおろそかにし、わからないこ
とや確認が必要なことが多くあったはずあった
が、先生に相談せず決め、結果的に失敗するとい

ったことが多くあった。

よって、今回のグループの活動を通じ、ボランティアや地域活動を行う意味や意義、先を見通し、計画しながらの事前準備の重要性といった、これからひとりのソーシャルワーカーとして、また社会人として必ず求められること、必要なことを学ぶことが出来たと考える。

さいごに、今回一緒に活動を共にしたグループメンバーとは折り合いがつかなくなることもあり、わたしはかなり自分勝手な行動をしてしまった。しかしその際「気にしなくてもいいからね」、「無理せずにやろう」とわたしを責めずに心配してくれるメンバーに、感動するとともに罪悪感を持っていた。このことから、仲間の大切さと責任の重さを考えさせられた。この考えを胸に秘め、これからのグループ活動だけでなく、将来自分がかかわるすべてのグループで大切にしていこうと考える。

4-3 半年間の学びの概要

ゼミの活動の中で印象に残っているものは、初回授業の役割分担と、特別養護老人ホーム“ベルポートまるこ”の初回見学から企画実施までの活動についてである。

前期のゼミの活動で、クラスのメンバーのおおよその人間性や、クラス全体の“色”といったものがあり程度把握、というよりは理解が出来ていたと考えていた。だがそれは、前期のゼミの活動の内容がおおよそ個人で行うものが多く、その個人の考えが理解できただけであった。初回授業でグループごとに役割を決めた際、グループのメンバーや他のグループのメンバーの個人活動では見られない、グループの連携を円滑に進めるために、相手の意見を聞く姿勢の違いなどといった、ゼミのメンバーの異なった内面を見られた。以上

のことから、初回授業の際、私が最も考えさせられたことは、人の内面性の見方や、グループ内の連携による自分や相手の考え、伝え方の変化を学んだと考える。

ベルポートまるこでの活動は、人の感情について考えさせられた。このように考えたのは、企画の計画の際には、大前提で、「誰もが楽しめるかつ、わかりやすいレクリエーション」を企画として行おうと心掛けていた。考えた結果、「動物ビンゴ」という特殊なビンゴゲームを行うことにした。ベルポートまるこでの企画実施の際には、私はレクリエーションの司会者を担当した。私にとって、この“司会”が特に自分の成長につながったと考えている。なぜなら、司会とは、レクリエーションの間、つまり、司会者が話をしている間に相手につまらないという感情を持たせないようにしなければならないからである。合間合間に簡単な問題を織り交ぜたり、楽しいしゃべりかたを意識したり、企画のすべてにおいて楽しませることが出来たと考える。そして、活動を通じて考えたことは、相手を楽しませるには事前準備の段階で、“自分も楽しむ”ということが求められるということと、そういった感情は相手も敏感に感じ取られるということを考えさせられた。

4-4 半年間の学びの感想

この半年間は、自分の“心”や相手の“心”について考えさせられることが多いと感じた。グループワークでの、相手の意見を尊重しながらも、自分の意見を伝え、お互いに納得のいく意見を導き出すという経験からは、心と心のぶつかり合い、そこから導き出される事柄の価値を学んだ。実習の際、司会という立場での、相手の「楽しい」という感情を引き出し、企画を終始楽しんでもらうという経験からは、相手の心を誘導し、場を一体

にし、心を一つにする方法と重要性を学んだ。こうした“心”に対して様々な点を学ぶことができたであろう。

こうした“心”に関する学びが出来たことは私の将来にもつながっていると考える。私は将来、地域の人たち全員が居心地の良いと思える施設を創設しようと考えている。全員は厳しくとも、大勢の人たちのためのもものとなると、最低限以上の“心への理解”が求められる。将来に向けての一步を着実に歩むことが出来た。半年の学びを通じて、私はこう考えた。

参考文献

別所温泉観光協会 (<http://www.bessho-spa.jp>)

信州上田観光協会 (<http://www.ueda-cb.gr.jp>)

2019年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「記録」担当

F19025 臼田綾乃

F19026 内海遥

F19027 小林健人

1. グループ活動の概要

活動報告会で記録係の発表で流したスライドショーをグループ活動として以後内容をまとめていく。まず事前準備をして、半年間で行った各班の活動についてスマートフォンのカメラを使って写真を撮影し、スライドショーで用いる写真を集めた。この際、役割分担は班内で事前に各活動で写真を撮る人を一人決めて置き、その他の二人は自主的に写真を撮っておくことでもし決められた一人が役割を忘れることがあった、忙しくて役割を全うできなかった場合にも穴を埋められるようにした。また各活動で写真を撮る係は連続することや固定することがないように工夫し役割分担をした。スライドショーの作成に当たっては全員で行った為特に役割分担は行っていない。

企画実行までの流れとして、まずは写真の準備に約半年をかけた。スライドショーの作成には報告会までの一か月ほどを費やした。具体的に写真撮影とスライドショーの作成について記載する。

写真撮影は、先に書いた役割分担をもとに行った。半年間のゼミ活動で行った企画や活動すべてにおいて写真を撮影した。学校での活動については関係ないが、学校外で行った活動（無言館、ベルポート丸子、上田城、別所温泉）については学生以外の一般の方が映らないように配

慮をし、プライバシーの保護に気を付けた。特にベルポートまるこでの活動では、利用者さんとの活動の様子や施設内を撮影するのに許可をとる必要があったため、必ず施設の方に許可をいただいてから写真を撮影するようにした。撮影については、ゼミの学生全員が必ずスライドショーに入るようにしたかった為、撮られる人や班に偏りが出ないように工夫し撮影をした。

スライドショーの作成に関しては、スマートフォンのアプリを使ってこれまでに撮影した写真をスライドショーにまとめ、そのデータをパソコンにコピー、コピーしたデータを事前に作成していたパワーポイントに入れて完成させた。

当日は報告会でパワーポイントを使って発表をし、その発表の中で作成したスライドショーを流した。

2. F19025 臼田綾乃

2-1 グループ内の役割

私たちのグループは記録係で主に写真を撮ることだ。だからあまり役割というものは決まっていなかったが、グループ内では小林くんがグループ長としてまとめてくれていた。私は無言館や地域活動などゼミの皆や、建物の写真を記録に残した。授業でも黒板に書いてある重要なことは写真に撮った。グループでそれぞれに写真を撮って一番良いものを決めてグループの一

人がLINEグループにアルバムとして送った。私はその写真をグループで提供する役割だった。

ベルポートまるこでは利用者さんとの交流風景や貼り絵と塗り絵の完成した作品を写真に残した。利用者さんが真剣に色を塗っている姿を撮れて良かった。他の班に比べれば目立った活動はしていないが、記録係は自分たちのグループだけでなく他のグループの様子も見て、記録する役割もあった。だから一步後ろから皆の様子を見ることができたと思う。

2-2 グループ活動を通して

私たちの活動は、上でも述べたようにゼミの様子を記録に残す係だった。無言館やクリスマス会、地域活動など三人でゼミの色々な写真を撮り、ライングループでアルバムを作った。報告会では、活動内容や感想の発表以外にもスライドショーの作成を行った。画像だけでなく、「ラックライフの初めの一步」という音楽を使いより皆に楽しく思い出に残るようなものを作った。そのために三人で、意見を出し合い協力し完成させた。グループ活動ではグループ長に頼ってしまっていた部分が多かった。しかし、三人できちんと連携を取って活動ができた。

また、記録係としての役割を通して協調性や自主性も学ぶ事ができ、班をまとめることで活動をよりスムーズに効率よく行う事にも繋がりが良かった。

2-3 半年間の学びの概要

この半年間で様々な場所へ行った。最初は国際福祉機器展へ行き、グループで調べたい機器の説明を聞き、体験をした。私は愛移乗くんという移動機器を体験した。全然力を入れていないのに車いすから移動できたので驚いた。他にも目線で文字を打つものなど素晴らしい技術のも

のばかりだった。

無言館では画家を目指していたが、戦争で若くして亡くなった人たちの絵が飾ってあった。戦争により命を絶たれた無念や、後世に想いを残そうとする熱意を感じた。無言館を訪れて、改めて自分の今の生活がどれほど幸せなことなのか分かった。

ベルポートまるこでは一回目は利用者さんと話したり、どんな様子か確かめたりするだけで精いっぱいだった。会話が続きなくて困った。職員さんと話し合っけて貼り絵に決まった。事前準備では貼り絵の下絵を描いたり、前回の反省をしたりした。二回目の実習では、二人の利用者さんと貼り絵をする予定だったのが、一人しかいなかったため、その利用者さんがちぎったものを私たちが貼ることにした。しかし、すぐに利用者さんは飽きてしまって私たちだけで作業をしている状況になってしまった。それを見兼ねた職員さんが、貼り絵をする予定だったもう一人の利用者さんを連れてきてくれた。その利用者さんは貼り絵をあまりやりたくないと言っていたので、急遽貼り絵から塗り絵に変更した。そこは臨機応変に対応できた。利用者さんにこれはどんな色を塗れば良いのかと聞かれたので、実際の写真を見せて、一緒に色鉛筆の色を選んだ。利用者さんはとても真剣に生き生きと塗り絵をしていた。利用者さんの気持ちを考え、臨機応変に対応したことで楽しんでもらえた。

地域活動は、私たちのグループは上田城へ行った。イヤマフを着けて聴覚障害者はどのように感じているのか体験しながら歩いた。私は観察者でガイドと体験者の様子を観察する役目だった。体験者は周りの声や足音が聞こえなくて

怖い、鳥の声や水の音も聞こえないと言っていた。そしてイヤマフを外したときには、「外したらこんなに違うのか」と驚いていた。とても貴重な経験であったし、聴覚障害者の気持ちが少し分かった。障害者の方に寄り添うには気持ちを理解するというのは大切なことだ。

報告会の準備では、半年間の活動のスライドショーを作成した。記録係の活動の集大成である。半年間のゼミ活動の様子を三人で話し合い分かりやすく、良いものを選んだ。発表はまだだが、皆の思い出に残るようなものが作れた。

この半年間の学びは来年度の実習にすべて活かせるものだ。反省点を把握し、次にどう改善し克服するのか考える。

2-4 半年間の感想

私は将来、児童系の職業を目指している。半年間で児童系の内容は扱わなかったが、それでも経験から活用できるものはたくさんあった。クラスに障害をもつ児童がいたら教師が理解していなければその子に寄り添うことはできないし、それを他の生徒にも、その障害を理解してもらうには教師が一番よく知り、説明できなければならない。だから障害を理解するために体験してみるというのはとても良かった。ベルポートまるこでも利用者さんの気持ちを考える、臨機応変に対応することの大切さを学べたので自分は半年前に比べて少しは成長できたと思う。記録係でもグループ活動を通してグループで連携し、協力することの重要性を知った。残りわずかだが、ゼミでの残りの時間を大切に過ごしていきたい。

3. F19026 内海遥

3-1 グループ内の役割

私たち記録係はクラスで校外学習に行ったとき、みんなの様子を写真で撮り、プレゼンテーションをする時、班の皆で話し合っていたりする時に写真を撮り、記録として収めた。

初めてクラスの活動として「無言館ツアー」に行った。私はクラスの人たちの集合写真や、学びを深めている様子を写真に収めた。「ベルポートまるこ」、「地域活動」も同様である。その収めた写真は伊藤クラスの LINE グループにアルバムを作成し送信した。私たち、記録係は小林さんがグループ長だったため、彼が率先して私たちに写真の指示や、LINE グループへの写真の送信を率先して行ってくれた。私たち記録係は役割を分担したりすることはあまりなかった。そのため、一人一人が進んで記録を行っていた。だからこそ、三人がそれぞれ良いと思ったクラスメイトを写真にとるため、同じ写真が減多になく効率よく記録係の仕事をする事が出来た。

3-2 グループ活動を通して

私はグループ活動を通していろいろなことを学んだ。地域活動では視覚障害、聴覚障害、身体障害を体験しながら上田城、別所温泉を歩き、「障害がある人でも楽しむことが出来るのか」という学びだった。私たち班は聴覚障害を体験し、「体験者」「観察者」「ガイド」とそれぞれ役割を与えられて、上田城を歩いた。私は体験者をした。実際に障害を体験するために、耳にイヤマフというものをつけて、上田城を歩いた。すると、聴覚障害があると、自然に声が大きくなって話してしまったり、通行人から挨拶をされても気づかなかったり、自然の音や歩く音が聞こえなく、とても不便であった。そこで、班員である「ガイド」が私を誘導してくれた。聴覚障害を患っていても、ガイドが近くにいる、普段

よりも大きな声で話したり、うなずいたり、ジェスチャーを入れながら話してくれたおかげで、上田城の周りを楽しく、最後まで歩くことが出来た。班員の「ガイド」は最初、普通に話しかけていた。けれどそれでは、聴覚障害のある人に伝わっていないと理解し、ジェスチャーを付けて話したり、大きな声で話したり、工夫をしたりした。それを見ていた「観察者」は聴覚障害を患っている人はこんなことが出来ない、でも助けてあげればこれはできる、などの出来ること、出来ないことの理解をすることが出来た。この活動を通して、私は「体験者」をして、聴覚障害を患っていても、ガイド、観察者が助言をしたり、サポートしたりしてくれる人が近くにいれば楽しく生活できることを学んだ。そして学校で、上田城で聴覚障害を体験したグループ、視覚障害を体験したグループ、身体障害を体験したグループの発表、別所温泉で聴覚障害を体験したグループ、視覚障害を体験したグループ、身体障害を体験したグループの発表をした。それぞれのグループであったことの見聞交換をすることで班だけではなく多くの人の意見を取り入れ、学びを深めることが出来た。

3-3 半年間の学びの概要

2019年後期の「人間と社会の理解Ⅱ」伊藤クラスにおける学び全体を振り返る。国際福祉機器展見学から初回授業(役割分担)、無言館見学、特別養護老人ホーム(ベルポートまるこ)事前学習、特別養護老人ホーム初回見学、社会福祉基礎実習報告会見学、特別養護老人ホーム企画に向けた検討、特別養護老人ホーム企画実施、振り返り、地域活動、発表会があった。国際福祉機器展では、たくさんの福祉器具を見ることが出来た。高齢者の運動不足の解消のために作ら

れた、下半身だけを動かして足の筋肉低下を防ぐ機械を体験した。こういった装置があれば、高齢者の運動不足は解消されるのではないかと考えた。福祉器具はどれもクライアントの要望に応えられるようなものばかりだった。しかし、値段が高いため手に入れることのできる高齢者はわずかではないか。と考えた。無言館見学では、名前の通り静かな場所だった。しかし、戦争で亡くなってしまった人の思いや、叫びを絵から読みとることができた。無言館に行き、今当たり前のように生きていられることに感謝し、日々の感謝を忘れないということを改めて実感することが出来た。特別養護老人ホーム(ベルポート丸子)では実際に利用者さんと関わった。用意していた、折り紙、ちぎり絵は上手くできなかった。しかし、塗り絵をすることが出来た。突然のトラブルにも対応するということが出来た。私は養護施設に行き、利用者さんと実際に何かをしたり話したりするのは初めてだった。いざ、利用者さんと話したりすることはとても緊張した。やることを、スムーズに進められなかった。しかし、実際に利用者さんと関わることは良い経験になった。地域活動では、私は聴覚障害を体験した。そこで私が学んだことは、聴覚に障害があると、外を一人で歩くということがとても困難であり、不安であるということだ。そのため、どこかで聴覚障害、何らかの障害を持っている人を見かけたりしたら、その人に対して私にできる限りの配慮をしたいと考えた。発表会ではケーキを作った。お題はクリスマスだった。クリスマスをイメージしてケーキをみんなで作った。みんなでトッピングをした。みんなでケーキを作ることによりとても楽しく、協力してケーキを作ることが出来た。このことから、クラスの人

たちともさらに仲を深めることができた。

3-4 半年間の学びの感想

半年間伊藤クラスでたくさんの福祉についての学びを深めた。私はその中で、自分自身には福祉は向いていないのかな。と考えるようになった。それは、国際福祉機器展や、養護施設に行くことによって、私自身が福祉にあまり興味がないため学びを深めていってもあまり意味がないのではないかと考えてしまうことが多かった。そのため、将来は福祉の仕事に就くことはなさそうだ。しかし、国際福祉機器展、無言館、養護施設、地域活動などに行き、福祉の心を持つことは大切だな。と考えることが出来た。特に養護施設では利用者さんの立場になって考えたり、発言をしたりしなければならぬ。そして、利用者さんが話し出したら自分ばかり喋るのではなく「聴く」ということが大切だと考えた。それは、福祉施設に働いているから相手の話を聴くというわけではなく、どこに行っても人の話を聴く力というのは大切になってくる。そのため、これから福祉の道に進まなくても福祉の心は持ち続けることが大切だ。半年間伊藤クラスで学びを深めて、「福祉の心」をもつことの大切さを学ぶことができ、その心を忘れずに生活していきたいと思う。

4. F19056 小林健人

4-1 グループ内の役割

私は記録係というグループの中で、グループリーダーという役割を持った。そして、リーダーとしてメンバーへの声掛けやメンバーからの相談に乗ること、できるだけマイナスな行動や言動はしないように意識し動くことでメンバーの係に対するモチベーションを下げることなく、

むしろ上げられるようにした。

特にグループ内での言動や行動には気を配った。例えば、行動においては、パワーポイントを使っただけの発表があればその作成を自ら進んですることでメンバーからの信頼をより強いものにするのと同時にできる限りメンバーには負担が減るよう配慮をした。言動においてもグループの士気を下げないようにマイナスな表現を用いた言葉は発さないように気を配り、メンバーがそのようなマイナスの表現を用いて発言していれば、そのマイナスな気持ちをプラスに変えられるよう励ましや応援をした。

また、メンバーの様子を見て、伊藤ゼミのライングループにアルバムを作る役割がいなかった為、アルバムの作成も自ら進んで行った。

4-2 グループ活動を通して

私はグループ活動を通して、大きく分けて3つのことを学ぶことができた。

まず、一つ目は「協調性」についてである。グループ活動をする中で一番大切だと感じ、学ぶことができたのがこの「協調性」である。この協調性が重要だと感じた場面として、特に学外での活動が挙げられる。学外の活動では班ごとに行動することが多く、なるべくまとまって動かないといけなかった。そのような場面で、協調性が劣っていると集団行動や周りへの配慮が欠けてしまい、迷惑をかけることになる為、協調性はとても重要だと学ぶことができた。

二つ目は、「計画性」である。ここでは、計画性が特に足らなかったと感じた場面を例に出し論じていく。私の計画性が特に足らなかったと感じた場面は、ベルポート丸子での実習の際である。ベルポート丸子に到着してから、本当はベルポート丸子の外観や内観を撮るとい

う仕事を記録係という役割を全うするために果たさなければならないのにも関わらず、我々記録係はその仕事を果たすことができなかった。ここで、もし計画性をもって準備ができていたならこの仕事は果たすことができたはずである。この失敗の経験から我々はベルポート丸子での二回目の実習の際、事前に班内で写真を撮ることを忘れないように確認をし、計画性をもって役割を全うすることができたのは失敗からの学びができ、改善もできたという点で良かったところである。

三つ目は、自分から前に出て行動することの大切さである。これは自主性の重要性に気付いたともいえる。私自身の話を少しすると、私はあまり自分から進んで何かをするのは得意ではない。そのため、たいていの場合受け身の姿勢をとりがちである。しかし、この記録係の班の中では、私以外のメンバーも自分から行動するのは得意ではなく、もしリーダーという立場にある私から動いていかなければうまくこの班は回らないだろうと考えた。そこで、グループ別の発表があればその準備も進んで行った。また、撮った写真をグループに貼るという行為も自主性を意識して行ったことである。このことによって、班のメンバーからの支持も得ることができ、感謝をされるが多かった。これが私のモチベーションにもつながり、結果として班の士気を安定させ、結束することにもつながった。この自主性の重要性に気づき、実際に行動することでさらに学びを深めることができた。

4-3 半年間の学びの概要

国際福祉機器展見学では、ハンドメイドの自
助具から最先端技術を活用した福祉車両まで世界
の福祉機器を実際に体験しながら見学した。

ここでは実際に開発されている福祉機器に触れ、
良い点だけでなく悪い点も考察することで福祉
機器だけでなく「福祉」の世界を知ることがで
きた。この学びを通して福祉により興味を持つ
ことができ、より深い理解を得られた。

無言館見学では、公共交通機関を使用し無言
館に向かい、そこで戦没画学生たちが遺し、光
を浴びずに眠っていた作品たちを鑑賞した。無
言館で得られた学びとして、あれだけの素晴ら
しい作品を残しながらも戦争で命を落とした学
生たちの心の叫びを、画を通して感じることで
我々が今こうして平和な世界に生きていること
の幸せを感じるとともに、戦争のはかなさと醜
さを改めて感ずることであった。

ベルポート丸子初回見学では、事前学習した
施設に実際に行き、どのような場所でどんな支
援が利用者さんに対して行われているのかを見
学した。見学方法としては、各班が各ユニット
に入り、見学するという方法だった。時間は2
時間ほどであった。

ここでは行われている支援を見るだけでなく実
際に利用者さんとお話をする機会も与えられた。
この学びによって事前学習で得た知識をより深
いものにしたとともに、次回行う企画の検討に
用いる情報を得ることができた。

二回目に訪れた際に行った企画では事前学習
で得た情報をもとに班で考えた企画をユニット
で実施した。利用者さんと協力して貼り絵、塗
り絵を行い濃い時間を過ごすことができた。こ
こでの学びで臨機応変に動くことの重要性、事
前学習の大切さを切に実感することができた。

4-4 半年間の学びの感想

半年間の学びを経験し、私は福祉とはどのよ
うなものなのか、そして福祉を学ぶことにどん

な意味があるのかを学ぶことができた。もともと私は福祉とは障害を持っている方やお年寄りの方など普段の生活において不自由が生じる方に対して使われる言葉だと考えていた。しかし、この半年間の学びを通して、福祉とは一概にそういった社会的に弱い立場にある人だけでなく、この日本に暮らす国民一人一人に平等に与えられる幸せのことを指すのだと感じた。

そして、福祉を学ぶことで日常生活を支えている福祉をより細かい目で見ることができ、私たちが普段の生活でいかに福祉に支えられて生きているかを実感することもできた。この点に福祉を学ぶという意味があると感じた。

また、この半年間の学びを通して福祉が充実している部分とそうでない部分も感じることもできた。これからは、今の日本に足りていない福祉を我々若い世代が発見し、実際に行動することで補っていかねばいけない。今の社会では、福祉が全国民に平等に機能しているとは私は思えない。この原因にある格差や隔たりを福祉の力で埋めていかなくてはいけない。まだ私にはこの具体的な策は考えることができていない。しかし、このように考えることができたのもこの半年間の学びで福祉の心が自分に備わってきたからだと感じる。

私は将来保育士になりたいと考えている。それでもこの福祉の心は必ず必要になると思うし、福祉の心がしっかりと自分に定着していないとできない仕事だと思う。全員に平等に向き合い、接する。これは今私が学んでいる福祉の世界にも共通することである。この考えを根底においてこれからの福祉の学びをより深いものにしてきたい。

参考文献

スマホで極上の写真を撮るための基礎テクニック 18 選

(<https://blog.hubspot.jp/good-pictures-phone-tips>)

2019 年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「無言館」担当

F19042 金本京子

F19046 草場美侑里

F19073 佐藤輝

1. グループ活動の概要

無言館を見学する意義は戦没画学生の作品を見て戦争や学生とその家族について深く考えることはもちろん、上田市に住む者として一度は無言館の見学をして、上田のアピールポイントの一つとして他の土地の人に伝えられること、また無言館までの公共交通機関でのアクセスを把握していくことでもし聞かれたときの備えをしておくことである。

事前準備

- ・しおりの作成(金本)…無言館の概要や利用情報、当日のスケジュール、費用や注意点を記載したしおりを作成
- ・無言館への事前連絡(草場)…団体で見学に来ることと領収書の作成を電話で依頼
- ・伊藤先生との連絡の取り合い(佐藤)…グループの代表者として伊藤先生に随時活動の進捗状況を報告したり質問をしたりする。
- ・無言館の概要説明(草場)…無言館の概要や展示品などを文章でまとめゼミのライングループで紹介
- ・しおりとレポート用紙の印刷(全員)…ワードで作成したしおりと伊藤先生から受け取ったレポート用紙を支援課のコピー機で印刷
- ・印刷物の配布(佐藤)…印刷物を見学当日までに全員の手へ渡すように支援課に交渉してプリントの置き場を学内に設置

無言館見学当日 10/9

- ・料金の支払いと入場券、領収書の受け取り(草場)…窓口で全 22 名分の料金を支払い、入場券と領収書を受け取る
 - ・時間管理と交代時間を知らせる(金本・佐藤)…二つに分けたグループの交代時間を声掛けやライングループで知らせる
- 全員別所線とバスを乗り継いで無言館へ行き、無言館と第二展示館「傷ついた画布のドーム」を約 30 分ずつ 1, 2, 3 グループと 4, 5, 6, 7 グループに分かれて入れ替わり式で見学した。帰りもまた行きと同様にバスと別所線を乗り継いで帰った。なお、無言館の入場料金は大学の経費で、交通機関の料金は各自自費である。

無言館見学後に全員から集めたレポート用紙からは、戦争の残酷さや志半ばに命をなくしてしまった現在の我々とそれほど年齢の変わらない画学生の気持ちを生徒それぞれに考えて叶えたい夢ややりたいことがあっても国のために戦争に参加しなければいけない切なさや悔しさを感じる文章が多くあった。それと共に今自分たちが来ていることに対して感謝の気持ちを持つことを大事にする。また、このような画学生や作品の存在を後世に残していかなければならない。

2. F19042 金本京子

2-1 グループ内の役割

私たちの班は無言館を担当した。より理解を深めてもらうため、無言館を訪れる前に事前学習を行ってもらうように呼びかけた。また事前に説明資料を作成し全員に配布した。説明資料には、無言館の概要や利用情報、当日のスケジュール、費用や注意点などを記載した。概要には無言館の名前の由来なども書き、伝わりやすいように短く簡潔にまとめようと工夫した。スケジュールには何時にどの電車を利用するのかなど細かく書き、バスも利用する予定だったので両替に時間がかからないように小銭の準備もお願いした。大学に到着するのがお昼を過ぎてしまうので、午後から授業がある生徒のお昼ご飯の時間を確保するために、あらかじめ報告しておいた。説明資料と一緒に感想記入用紙も配布し、報告書の作成に利用するため無言館訪問の次週のゼミで集めるようお願いした。当日は駅に集合だったので少し早めに向かい、出欠確認を行った。電車からバスの乗り換えまでに時間があつたので、バス停の確認と時間の確認を念入りに行った。無言館の近くには第二展示館である「傷ついた画布のドーム」があり、2グループがそれぞれの建物を約30分間で入れ替わり見てもらうことになっていたの、時間に気を付け交代するタイミングで声掛けを行った。

2-2 グループ活動を通して

自分たちが主体となつてすることの難しさを知るとともに、3人という少数のグループで活動するなかで責任の重さを感じた。まず各グループに分かれたときに先生から助言はするがあくまでも学生が中心となつてすることを最初に伝えられた。私は最初、無言館についての事前学習を呼びかけ、それぞれで調べてきてもらう形

にしようと思っていたけれど、先生から説明資料を作っておいたほうが良いという助言をいただき作成することにした。確かに、呼びかけるだけでは忘れてしまっていたり、呼びかけが上手く伝わらなかったりと事前学習を十分に行えていない場合も考えられる。また自分たちが担当しているのだから、みんなにより理解してもらうためにも作成する義務があるのではと作成しながら考えた。これをきっかけに「担当になったけど先生も助けてくれるし大丈夫だろう」という考えから、「できるだけ先生には頼らずに自分たちで考えてなるべく行動しよう」という考え方に変わり責任感を感じるようになった。無言館での現地集合、現地解散が認められない理由として先生が「無言館は高齢者の方にとっては全国的に有名な場所であり、公共交通機関を利用する手段を説明できるようになるためにも、自分たちが一度は利用してみることが必要である。」ということをおっしゃっていてとても納得した。電車やバスを使って行くことにもちゃんと意味があり、もっと広い視野をもって物事を考えられるようになりたいと思った。時間の確認や呼びかけなどは積極的に行えたと思うが、先生から言われて気づくことがたくさんあり自分の力不足を痛感するとともに、今回の経験を無駄にせず次に生かすことが一番大切だと思った。その場所へ行く目的など、どうしてそうするのかをよく考えたり、集合した時に先生から言われて点呼するのではなく自分たちから行ったりするなど、もっともっと周りを見ることなどだ。また3人しかいないので、一人が休んでしまった時にカバーするのがとても大変で自分の責任の重さを感じた。たくさんの役割があるのでこのようなグループ分けになったの

かもしれないが、私は先生が1人1人にもっと責任感を感じてもらうためにこのような形にしたのではないかと考えた。最初は少ないなと思っていただけれど、話し合う時もお互いに思っていることをそれぞれが話せるし、大人数ではなかなかできないことができたので良かったと思う。

2-3 半年間の学びの概要

9月25日に国際福祉機器展を訪れた。「国際福祉機器展」とはハンドメイドの自助具から最先端技術を活用した福祉車両まで世界の福祉機器を一堂に集めた国際展示会。「階段昇降機」について調べた。階段昇降機とは、その名の通り「階段を昇り降り」するためのリフトである。初回授業では、進行管理、記録、企画、無言館、ベルポートまるこ、地域活動、企画、活動報告の7つの班に分かれた。私たちの班は無言館を担当した。第2回の授業は無言館を訪れた。第3回の授業では地域活動のための事前学習を行った。第4回の授業ではベルポートまるこを訪れ、利用者さんと交流した。第5回目の授業では2年生の社会福祉基礎実習報告会に参加した。第6、7回目の授業では第8回目の授業で訪れるベルポートまるこで行うための事前準備を行った。第9回目の授業ではベルポートまるこでの活動について振り返り、班ごとに発表した。第10回目の授業では地域活動～障害があっても楽しめる～というテーマで上田城と別所温泉を訪れた。私たちの班は上田城を訪れた。第11回目の授業では地域活動での振り返りを行った。

2-4 半年間の学びの感想

国際福祉機器展では、階段昇降機といっても直線型のものもあれば曲線型のものもあり、また速さ重視のものもあれば安定性や乗り心地重

視のものなど本当に様々だった。それを見て、色んなタイプの人を想定しているからこそだと思った。しかし、階段昇降機のイスから降りるときにイスは回転するが足元が回転しないものがあり、足を挟んでしまう危険があると思ったので足も一緒に回転するようにした方がいいと思った。無言館は、戦争で没した画学生の絵が展示されており、そのような絵を見ることはあまり経験したことがないものだった。中には筆使いが分かるものもあり、とてもリアルであった。病院から見た森林を描いた絵には、ところどころ赤茶色が混ざっており、私にはそれが戦争に対する憎しみや悲しみのようなものを感じた。戦争中でも絵を描き続けた画学生の作品を見て、どんなに不利な状況にいたとしても諦めずに夢を叶えようと強く思った。ベルポートまるこでは私たちの班は2回の訪問を通して利用者さんとお話ししたり塗り絵を行ったりした。自分で塗れる利用者の方は一緒に塗り、塗ることが難しい利用者の方は色を選んでもらい私たちが塗るといって臨機応変に対応できたところは良かったと思った。しかし、利用者さんの中には会話をすることが難しい方もいらっしゃって対応に困ってしまい、職員の方に頼りっぱなしになったのは反省すべき点だと思う。会話をすることが難しい利用者さんもいることは予測していたけれどいざその状況に直面すると戸惑ってしまい、積極的に動くことができなかった。しかし、会話は難しくても話しかけたときのわずかな反応から、その人の気持ちを読み取ることもできると思った。地域活動では私たちの班は、上田城を散策しながら視覚障害を障害者の目線で体験した。見えている人からしたらちょっとした段差でもつまずいたり、景色の綺麗

さを言葉で表しても完全に伝えることは難しかったりと、視覚から取り入れる情報量の大きさを実感した。お堀の周りは道が綺麗に舗装されているところが多く、道幅も広がったので歩きやすくとてもいいと思った。視覚障害を持っていたとしても視覚以外から取り入れられる情報や、感触などで十分に楽しむことはできると思った。この半年間の経験から、すべての出来事を通じてもっと広い視野をもって物事を見たり考えたりすることがとても大切だと学んだ。広い視野を持てるようになるには、とにかくいろんな経験をすることが大切だと思うのでボランティア活動などに積極的に参加しようと思う。たくさん失敗すると思うが、失敗することにもちゃんと意味があり、無駄ではないこともこの半年で学んだので恐れずに挑戦していきたいと思う。

3. F19046 草場美侑里

3-1 グループ内の役割

私は無言館ツアーのグループ活動において、無言館への事前連絡、ゼミのメンバーへの施設の概要の紹介、ツアー当日の入館券の受け取りを担当した。

具体的な内容としては、無言館ツアーの4日前に施設に直接電話をかけ、長野大学から2名での無言館の見学をしたいことと、それに伴い長野大学宛の領収書の作成をしてほしいことを依頼した。

ツアー前日には、伊藤ゼミナール全員のライングループで無言館の概要を無言館公式サイトやその他のサイトからまとめ、無言館の由来や主な展示物の概要などを紹介した。

ツアー当日は、無言館の受付窓口で一般1名、

大学生21名分の料金を支払い、長野大学宛の領収書と入館の券を受け取り、館内の写真撮影禁止や大きな声を出さないなどの見学上の注意点を聞いた。

3-2 グループ活動を通して

個人の役割として行った無言館への電話は、大学の経費で無言館の見学をする上でミスが許されない非常に重要な役割であったので連絡内容を確認して領収書の宛名に間違いが無いように注意した。このような、団体で施設へ事前連絡をすることは初めてのことで緊張したがあまりないことなので良い経験になった。

また、ライングループへの無言館の事前紹介は、少しでも無言館への興味を高めてもらい、楽しみにしてもらえるように文章を作ることを意識した。しかし、あまり内容を詳しく細かく言ってしまうとそこにしか注目しなくなるので事前により注目点を絞らないように心掛けた。

このグループのメンバーが決まった次の週に無言館ツアーがあり、お互いあまり話したこともない関係だったのでうまくいくか最初は不安ではあったが、こまめに連絡を取り合って役割も徐々に決まっていたのでチームワーク良く比較的スムーズに活動できた。

伊藤先生と連絡を取り合ってくれたり、支援課に用紙を置くスペースを使用していいか尋ねたりと私が気づかなかった部分の活動も個々でもらって、連携プレイがすごく大事だと思った。一人だったらおそらく気が回っていないであろう箇所にも誰かが気づいてくれたので、三人分の視野があると様々な側面から物事を捉えられるなど感じた。

他の活動の時もおおよその役割分担をしつつも進んでいないところやパソコン作業など苦

手なところはお互いに補い合いながらできたのでグループ活動でよかったと非常に感じた。しかしグループの活動だからこそ、自分が一日授業を休んだ日は他の二人に迷惑をかけてしまったので、そこは個人活動とは違って気をつけなくてはいけないと思った。一人欠けたらその他のメンバーの負担が大きくなることを考えておかなければいけないと思った。

3-3 半年間の学びの概要

国際福祉機器展見学ではグループで協力してそれぞれ事前に見学すると決めていた機器のコーナーを全て回ることができた。また、実際に福祉車両の操縦も体験することができ、学びを深めることができた。

初回授業(役割分担)では後期のグループの役割分担をした。私のグループは次の週に行く無言館のツアーを担当することになり、その準備も始めた。

無言館見学では静かな空間の中で戦没画学生の残した作品や物を見て、学生やその家族の気持ちや今を生きる自分について考えさせられた。また、担当グループとして事前準備からそれぞれ役割を決めて活動した。交通機関や施設見学の時間の調整や、施設への事前連絡など、企画側として段取りを行うことを学んだ。

特別養護老人ホーム事前学習では老人介護施設の種類などを学んだ。様々な種類がありそこに住む人の金銭事情や要介護認定の区分などの特徴が分かった。

特別養護老人ホーム初回見学では各グループでユニットごとに分かれて活動をした。そこに住む方の家にお邪魔するという気持ちで行動することを意識した。

社会福祉基礎実習報告会見学では先輩の基礎

実習の発表を聞いて、しっかり学びを深めている姿を見て自分が同じようにできるのか不安になったが頑張りたいと思った。

特別養護老人ホーム企画に向けた検討では前回訪問して関わったユニットの方が全員参加できて楽しめるような企画を立てた。塗り絵をよくすると前回聞いていたので昔話のイラストの塗り絵に決定した。

特別養護老人ホーム企画実施では楽しく会話をしながら塗り絵ができた。色を塗ることが困難な方は色と一緒に考えて私が塗るという方法をとった。終了時間を勘違いして企画通りに全てを終わらせることができなかつたのが一番の反省点である。

地域活動では白内障の疑似体験をするグループとして上田城を回った。歴史が好きなので純粋に上田城に行けるということが嬉しかった。大きなお堀に非常に興奮した。私はガイドとして白内障のゴーグルを付けた体験者を案内した。

発表では他のグループの発表を聞いて、実際に体験してみないとわからない困難を知ることができた。また、伊藤先生の話聞いて私は目の見えない人の後ろを歩いて方向や危険を教えようとしたが、腕を組んで前を歩けば断然楽に安全に歩けることが分かってそれを思いついていなかった自分が悔しい。

3-4 半年間の学びの感想

後期は外に出る活動が多く、上田の行ったことのない場所にもたくさん行くことができた。前期まであまり話したことのない人とも話せて、ゼミの皆とも仲を深めることもできた。また、特別養護老人ホームに訪問したり上田城で白内障の人を案内したりと自分で考えて行動する中で多くの足りない部分や未熟な部分に気づき、

短い時間ではあったがその中でも改めて福祉職の大変さや辛さを感じた。それと共にやりがいなども非常に大きいのだろうなと思った。私は将来のやりたいことがまだ無いが、ゼミ活動を通して視野が広がったと思う。それでも自分の生きている世界は狭く小さいもので、まだまだ知らないことや見たことのないものがたくさんある。今後は自分がやりたいと思ったことには積極的に挑戦をしていきたい。経験を積み重ねて様々な可能性を作っていこうと考えている。

4. F19073 佐藤輝

4-1 グループ内の役割

私はまず、班のメンバーと無言館のしおりについて、どのような構成にするのか話した。そして、手書きで作るほうが良いという案と、パソコンで作るほうが良いという二つの案がでた。先生とのコミュニケーションは一つに絞ったほうが、効率が良いという意見から、私の主な役割は先生とコミュニケーションをとりメンバーに伝えるということになった。それゆえ、わたしは伊藤先生にふたつの案が出たことを伝えた。すると、自分たちで自由に決めてよいと言われたため、案作成担当のメンバーに伝えた。また、領収書の手配担当のメンバーの進捗具合などを伊藤先生に報告した。そして、レポート用紙の作成について伊藤先生から案をいただき班のメンバーに伝え、話し合い作成した。つぎに、活動日当日の私の役割としては、ふたつの大きいグループに分けたうちの、第二展示館である「傷ついた画布のドーム」のグループの代表者を決めてもらい、チケットの受け渡しに同行してもらうように誘導すること、また、ラインでの交代時間の知らせや、終わりの知ら

せなどをおこなった。

4-2 グループ活動を通じて

グループ活動を通じて、学びえたことを具体的に記していく。班は私以外に二人のメンバーがいる。計三人の非常に少ない班構成である。メンバーが少ないからと言って、やることが少ないわけではない。自分たちで企画運営することは、一人ひとりの責任や役割が大きいので、より主体的に行動することができたように感じる。私以外のメンバーの役割としては、まず、一人目は、無言館に領収書の発行依頼のための連絡をとることである。指定された宛名書きとお品書きを伝えるとともに、先生が1名と生徒が21名の計22名が当日行くことを伝えた。また、もう一人のメンバーは、当日の活動内容や、電車の発着時刻、活動の意義や学びの概要がわかりやすく載っている葉を作成した。一人ひとりの役割を明確にすることによって、それぞれに責任感が生まれ、より能動的な姿勢になっていった。自分の役割の反省点としては、活動日当日、伊藤先生と連絡をとることや状況報告をすることを忘れていたことである。というのも、別所温泉で点呼をして、進行管理班に伝え、進行管理班から伊藤先生へ点呼結果を伝えてもらうようにしてほしいという連絡があったにもかかわらず、気づくことができなかった。伊藤先生に現状報告ができなかっただけでなく、進行管理班の仕事も阻害してしまった。この体験から、自分の役割をしっかりと認識し行動することも大切であるが、自分の役割にとらわれ過ぎずに、活動に携わるひととのつながりや関係性を意識しながら、自分が今なにを求められているのか、なにをすべきなのか考えながら行動することが重要なのだと感じた。ま

た、実際に戦没画学生たちの遺した絵を目の当たりにすることで、戦争のはかなさや無情さを痛感した。

4-3 半年間の学びの概要

はじめに、国際福祉機器展見学について記していく。見学に行く前に、自分が調べたい福祉機器をきめた。わたしは、介護補助に特化したベッドに興味を持った。ベッドといってもさまざま機能のベッドがあった。手元のコントローラーで姿勢を調節できるものもあれば、マットレスを外せることで、衛生管理が行いやすくなっているものもあった。見るだけでなく実際に体験することで、最新の介護補助ベッドの機能の多様さをより鮮明に感じることができた。また、障害の程度別にそれぞれ適したベッドがあり、障害者の方でも快適に眠ることができると感じた。つぎに、無言館について記していく。無言館での活動を企画運営することは大変であったが、終わった今では達成感を感じている。また、実際に自分と同じ学生が描いた絵や、残した言葉などを見ることで、当時の学生の想いや感情を感じることができたような気がする。そして、綴られた言葉はどれも素直でまっすぐなものだった。生きていたいという思いがひしひしと伝わってきた。しかし、彼らは徴兵によって画家や彫刻家、あるいはデザイナーや建築家などになる夢を絶たれ、戦死していった。戦争は苦しみしか生まないのだと改めて感じることができた。つぎに、特別養護老人ホーム（ベルポートまるこ）事前学習について記していく。事前学習はおおまかな内容だけを決め、すぐ当日を迎えた。施設に到着し、自分の担当する部屋へと移動した。部屋に入って驚いたことは、扉が内側からは開かない仕組みになってい

たことだ。クライアントの自由を制限してしまうことになると感じたが、制限しなければならぬほど高齢の方や、重い障害の方がいるのだと納得するとともに、気が引き締まった。事前学習では、再度訪れた際に行うレクリエーションを利用者さんの意見を伺いながら模索した。一時間半という限られた時間の中で、精一杯コミュニケーションを取ろうという思いでいたが、利用者の中には話すことさえ難しい方もいて、どのようにコミュニケーションをとればよいか困惑してしまっていた。次回の活動での改善点のひとつであると感じた。つぎに、社会福祉基礎実習報告会を見学した。先輩方の具体的で分かりやすい説明を聴いて、自分が考えの幅が広がった。自分は児童福祉分野に興味があるが、その分野だけに活動や意識を絞るのではなく、高齢者の介護や障害分野などさまざまな分野に興味を持ち、活動を分散させることが、視野を広げる上で大切であると学んだ。つぎに、特別養護老人ホーム企画実施について記していく。レクリエーションは塗り絵をすることに決めた。全身まひの方や、手の震えが止まらない方がいる中で、塗り絵をすることに躊躇はあったが、塗り絵を通してじぶんの障害や高齢と向き合い、身体能力の向上や達成感を感じていただくことができると感じ、実行に移した。手がマヒしている利用者の方にもできる限り頑張ってもらい、できない部分は補助することに努めた。塗り絵が完成し嬉しそうにしている利用者さんをみて自分も嬉しかった。会話ができない利用者さんともジェスチャーを交えて対話することで、コミュニケーションがうまれ楽しんでいただけていると感じることができた。

4-4 半年間の学びの感想

国際福祉機器展見学では、福祉に関わるあらゆる機器を見ることで、現在の福祉の進化の過程を肌で感じることができた。また、今後もさらに需要合わせて進化していくのだろうという未来への展望を持つことができた。それらをうまく活用していけるようなソーシャルワーカーになりたいと思った。無言館見学では、企画運営をすることを通じて、より深い学びをすることができた。ベルポートまるこでは、施設を利用する方と直接触れ合うことで、そのひとによりそったコミュニケーションとはなにかということを探ることができた。また、施設の職員の利用者とのかかわり方を見て、学ぶことも多くあった。地域活動では、上田城に訪れた。専用のゴーグルを使用して、白内障の方を体験した。実際に上田城を見ることが出来なかったことは、心残りではあるが、風を感じ、いつもは気にもしない音を感じ、白内障の方と感情を共有できたような気がした。この半年間で学び得た体験は、すべて自分の力になっていると思う。

参考文献リスト

- 1) 無言館 <https://mugonkan.jp/>
- 2) 別所線 <https://www.uedadentetsu.com/>
- 3) 信州の鎌倉シャトルバス
http://www.uedabus.co.jp/teiki_kankou/shuttle_bus.html

2019 年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「活動報告会」担当

F19053 鯉沼舞帆

F19067 酒井佑捺

F19101 中村誠

1. グループ活動の概要

私たちは、報告会の時間調整、報告書のフォーマット作成、回収した活動報告書の添削、報告書の原稿作成、活動報告書の印刷、製本を行った。

報告会について

報告会の時間調整では、パワーポイントの時間を設定した。班活動 10 分、各個人 3 分ずつの発表時間を設定し、パワーポイントを作成してもらった。

報告会の司会・進行は、進行係に依頼し、私たちは、報告会の感想をまとめた。

感想には、半年間の活動で気づいたことや裏方の重要性、目に見えないところでの活動の大切さ、学習から学修へ変化していく中で自主性が伸びていたことなどが挙げられていた。これらからわかるのは、半年間の中で、少しずつ成長をしていたということである。反省や失敗、自分に足らなかった部分があったとしても、次につなげようとしたり、それぞれの班活動を知り、認め合うことができたりと有意義な半年間を過ごすことができたと思う。自分が楽しいと思えることを見つけるひとつの通過点になったのではないだろうか。

活動報告書について

報告書のフォーマット作成では、先生の例を参考に自分たちで伊藤ゼミらしい報告書のフォ

ーマットを作成した。自分たちが楽しいと思える報告書になるように意識した。内容は以下のとおりである。

- 全体のページ数を決定 (p64)
- 表紙のデザイン (集合写真を入れる)
- 写真の枚数決定 (記録係にアルバム作成の依頼)
- フォントの設定
- 文字数の設定
- フォーマットの配布

活動報告書の作成では、まず、個人で完成させた報告書の回収を行った。スムーズに作業を行うために回収日を 3 回に分けた。1 回目は 12/17、2 回目は 1/5、最後の 3 回目は 1/15 に設定した。進行係と日程調整を協力して行った。最初に設定した日程では、製本が間に合わないことが分かったので、3 回目を 1/10 に変更した。添削の作業は、すべての報告書が同じ体裁になるように整え、誤字脱字を直し、推敲を行った。3 人で 7 班分を分担して添削し、ミスを減らすためにダブルチェックを行った。この時点で、ページのレイアウトを最終決定し、ページ数を 4 の倍数に整えた。

活動報告書の印刷、製本は 1/15 に行った。100 部作成するためには、コピー用紙が 1600 枚程度必要になるので、事前に学習支援課に相談し、コピー用紙使用の許可をもらった。当日の作業

では、印刷係二班と製本係一班の三班にグループ分けし、それぞれに報告会担当がつくようにした。

完成した活動報告書は、伊藤ゼミ 21 名に 2 部ずつ、残りの 68 部を長野大学の先生や伊藤ゼミの活動でお世話になった方々に配布する。

2. F19053 鯉沼舞帆

2-1 グループ内の役割

私は、グループ活動の中で、クラスへの連絡や報告書の回収など伊藤ゼミと報告会係をつなげる役割を担っていた。役割をはっきり決めたわけではないが、3 人で活動していくうちに自然と自分がすべきことをしていたような気がする。

クラスへの連絡には、伊藤ゼミのみんなに伝えたいことをライングループに送ったり、個人の報告書提出の締め切り日を伝えたりした。報告会係の中で、決定させた事項を伝えるだけだったので、苦労はなかった。しかし、報告書の締め切り日をクラス内にもう少し意識付けできるような呼びかけを行うべきだった。

報告書の回収は、ラインと Gmail のどちらかに送ってもらう方法をとった。回収したものは、題名を学籍番号と氏名が分かるように直してから、報告会係のライングループに添付した。

報告書の作成段階では、3 人で分担して、添削をし、書体やレイアウトなど細かなところまで食い違いが無いように協力して作業をした。ひとりひとりができることをやって、補い合いながら活動をしていくことができた。

2-2 グループ活動を通して

この 3 人で活動ができて本当に良かったと思う。最初は、意外なメンバーが集まったなと感じていたが、なんだかんだ楽しく活動すること

ができた。

私は、活動報告書のような何ページもあるような文書をつくったことが無かったので、まったく想像ができないまま作業を始めていた。最初に、個人で報告書を提出することを聞いたときは、学生それぞれで考えて、好きなように書いたものを受け取って、編集すればいいと思っていた。しかし、活動報告書は、公に公表するもので、レイアウトやフォントをそろえ、表紙や目次、奥付をつけるといったようにしっかりとしたものをつくらなければいけないことを知った。そのためにフォーマット作成を始めたが、そこでも完成形を決めて、ページ数を設定したり、アルバムの写真数の目途を立てたりする作業があり、文書をつくる時には、計画性がとても大切だということを知った。

また、報告書の回収の際には、誰に、どのように、どのような方法で提出を行えばいいのか、クラス全員にしっかり伝えておくべきだと思った。最初は、班ごとにまとめて提出の形をとっていたが、締め切り日に、個人提出に変更したので、迷惑をかけてしまった。また、ファイル名をいちいち私に変更するなら、最初から提出する際に、学籍番号と氏名にするように指示しておけば良かった。

さらに、添削の作業中に気が付いたこともあった。それは、フォーマットが分かりづらかったのではないかということだ。提出の際、フォントや段組みを変更してあることがあった。情報の共有がクラス内で出来ていなかったのだと思う。フォーマットを作成した私たちが細かな情報を把握しているだけではだめで、みんなができるように伝える工夫をする必要があると学んだ。工夫の一つに、フォーマットを提示する

だけでなく、フォントや二段組にするということやライングループで伝えるという方法があると思う。口頭では分かりづらく、忘れてしまうこともあるので、記憶に残り、何度も見返せるように情報を可視化することも必要だと学んだ。

活動報告会係になり、今までやったことのない作業をしたことで、私の経験値が上がったような気がする。学んだことを、次に生かすことで成長ができると思うので、今回の活動で得たことを大切にしたい。

2-3 半年間の学びの概要

後期の半年間で、国際福祉機器展見学、役割分担、無言館見学、特別養護老人ホーム（ベルポートまるこ）実習、社会福祉基礎実習報告会見学、別所温泉と上田城に分かれて調査を行った地域活動、クリスマス会、活動報告会を実施した。

国際福祉機器展では、信州大学で研究されている歩行支援ロボットについて学んだ。歩行困難な状態からでもロボットを装着することで、自分の足で歩くことができるようになる。筋力の衰えや病気で歩けない人にとって、将来このロボットが生活の支えになると感じた。

伊藤クラス内での役割分担では、私たち4班は、活動報告会係になった。楽しい報告書になるように意識して取り組んだ。

無言館見学では、戦没画学生やその家族の思いを絵画から感じた。絵画に添えられている説明書を読むたびに、戦争から必ず生きて帰って絵を描きたいという思いを感じ、ただこの時代に生まれただけで、夢が叶わなかった悲惨さを感じた。

ベルポートまるこ実習では、1日目に利用者さんがやりたいことを調査し、2日目にたこ焼きパ

ーティーを実施した。たこ焼きの材料を決めるなかで、私は利用者さんのことを理解できていなかったと感じた。しかし、たこ焼きを喜んでくれたことはとてもうれしく、また訪れたいと思った。

基礎実習報告会では、今年の夏に私が体験することの想像を膨らませることができた。先輩たちのアドバイスを参考にして、頑張りたいと思う。

地域活動では、別所温泉に行き、私は体験者としてイヤマフをつけ、聴覚障害者が感じる危険を調査した。聴覚障害者は、視覚を駆使して、身の安全を守ることがいかに大切か、身をもって知ることができた。

車の接近に気づけないことはとても危険だが、例えば、Bluetooth等の機能を使って、補聴器と車をつなげ、振動を起こすことで車の接近を伝えることも科学技術があれば可能なのではないだろうか。

クリスマス会では、3班に分かれて、クリスマスケーキを創作した。どれもすごく上手で、センスが光っていた。私たちの班のケーキもかわいくできて、すごくおいしかった。とても楽しい1時間だった。

活動報告会では、半年間の学びを振り返ることができた。反省から次の学びにつなげていきたいと思う。

2-4 半年間の学びの感想

この半年間は、今まで経験したことがないことに挑戦したり、見たり、聞いたり、たくさんことに触れられた半年間だったと思う。社会福祉学部に入って、高校までの自分とはまったく異なる経験をしていく内に、なんとなくの福祉を少しだけ私に関わりたい福祉にイメージを変

えていくことができた。福祉の仕事は、対象が変われば支援方法や対応が変わってくるため、まんべんなく関わるのは難しいと思うけど、それでも私は、一部の人だけじゃなく、助けを必要としている人すべてを受けられるようなかわり方ができたらいいなと思う。興味があるのは、医療、児童、司法の分野だけれど、福祉機器展に行ったことで、福祉機器を誰かのために作っている人がたくさんいることを知った。常にひとりひとりと向き合って働くベルポートまるこの職員さんのすごさも知った。聴覚障害者の体験をしたことで、少しだけ怖さを知り、常にその状況で生活している人たちのことを考えることもできた。分野にとらわれず、いろいろな視点の福祉をこれからも見ていきたい。

3. F19067 酒井佑捺の役割

3-1 グループ内の役割

私の報告会の活動の中での役割は、報告書のフォーマットを作成するにおいて全体のページ数や表紙のデザイン、フォントの設定や文字数の設定などについて考え、いくつかの案を出した。伊藤先生の報告書のフォーマットの例を参考に、伊藤ゼミらしい報告書になるように考えながら作成するよう活動を行った。

また、皆に書いてもらい提出してもらった活動報告書の添削、報告書の原稿作成、活動報告書の印刷、製本を3人で分担して行った。添削を行う時は最初に班全員の報告書を1つに繋げてそこから全て2段組にした後フォントを揃え、誤字脱字を直し推敲を行った。その後、各自で行い完成した班の報告書を1つのファイルにまとめ班全員に共有し、ダブルチェックを行いミスがないようにした。活動報告会の印刷や製本

では、ゼミの皆を印刷係と製本係に分けてから作業を行い、そこの中の1班を私が担当し指示を出し自らも作業し活動報告書を完成させた。

3-2 グループ活動を通して

グループ活動を通して自ら行動する事の大切さを感じた。私達の報告会の活動は、まず活動報告書のフォーマットを作成する事であったが、伊藤先生との話し合いや3人での集まり中で徐々に完成させる事が出来た。私自身、フォーマットを作成するという活動が初めてであったため上手く作る事が出来るのか心配であった。また、活動報告書の添削や報告書の原稿作成、活動報告書の印刷そして製本に関してもあまり行った事がなかったので不安が大きかった。何よりも、自分のものを添削する事はこれまで何度も行って来たが、他の人のものを添削し、その添削したものが1つの作品となり活動報告書というゼミ活動のまとめに当たるものになるという点で非常に責任を感じる事が多かった。また、フォントや2段組、文字数など細かい点においても一か所でも間違えてしまうと活動報告書の完成度が低くなり、その部分が目立つ事もあるので作業を行う際は1人の時など、より集中できるように環境の面も心掛けるようにした。

次に報告会の時間調整などを行った。また、パワーポイントを作成してもらい班活動10分、各個人3分ずつの発表時間を設定した。その中で報告会の司会や進行は進行係に依頼し、連携を図った。しかし、実際の報告会では設定していた時間よりどの班も早く終わってしまったため時間は多く余ってしまった。時間設定において、少し見積もりが甘かったように感じた。

班のメンバーは私以外に2人いてどんな時も多くの案を出す事、他の係との連携、グループ

ラインにおける情報共有などを率先して動いていて私もより協力して活動しようという気持ちを高めてくれた。1人ではなく、グループとして1つになり様々な活動を行う事が出来、達成感も感じられた。そして活動をする中で何よりも安心感がありコミュニケーションも取りながら皆で楽しく、そして真剣に取り組む事が出来て良かった。

3-3 半年間の学びの概要

9月25日に、東京で行われた国際福祉機器展を見学した。事前学習としてまず、5人程のグループを作り各自の見学したい福祉器具を決め、私は(株)アムの水洗式ポータブルトイレにした。実際に実物が置いてあり、さらに水の流れも見る事が出来た。他にも様々な分野の福祉器具も見る事、体験もする事ができ、福祉器具に対しての学びを深めるきっかけになった。

ゼミの中での役割分担を決め、3人1班で私達の班は「活動報告会」を担当することになった。報告会の時間調整や、ゼミの皆に提出してもらった活動報告書の添削、報告書の原稿作成、活動報告書の印刷、製本も行った。

無言館の見学では、徴兵により画家や彫刻家、デザイナー、建築家などになる夢を絶たれ戦場に散ってしまった美術学生(戦没画家生)達の遺した絵が展示されていた。他にも、学生の遺品である画材セットやスケッチノート、戦場への召集令状や戦死の報告書類なども展示されていた。1度しかない大切な人生の中で自分のしたい事も出来ず、苦しみながらこの世を去ってしまった方々がいる事を再認識すると同時に戦争というものもう二度と起こしてはならないと思った。また、今このように平和に暮らす事が出来るのは、戦没画家生含め多くの人々の犠牲

があったからこそであり忘れてはならず今後も伝えていかなければならないと感じた。

ベルポートまるこ実習では、利用者さんと沢山の会話する中でゆっくり話しながら目を見て話す事が改めて大切だと感じた。2回目の実習では、たこ焼きパーティーを行い、固形物は不可であったためソースをいくつか用意するなど臨機応変に対応する事ができ、利用者さんや職員さんに美味しいと言ってもらえて良かった。2回の実習であったが多くの事を学べて良かった。

地域活動で私達の班は別所温泉に行き、聴覚障害を体験した。私はガイドをする事になった。事前学習を行い、当日はなるべく大きな声でゆっくり話すようにする事で聴覚障害を持っていても聞き取れると感じた。また、体験者が車の音などが聴こえにくいと言っていたためガイドが通路側で歩くなど工夫し安全第一で活動を行った。

3-4 半年間の学びの感想

後期の半年間で東京に行き、国際福祉機器展を見学、上田市にある無言館を見学、特別養護老人ホームで実習、地域活動、クリスマス会など短期間で様々な活動を行う事ができ、とても良い経験になった。その中で、協力する事の大切さを改めて実感した。また、ゼミの皆とも関わる機会が沢山あり積極的にコミュニケーションを取る事で仲も深まり、物事における私自身の考え方や感じ方もより深める事にも繋がった。私は将来、福祉系の公務員職に就きたいと考えているが、他にも多くの職業があるため多くのボランティアに参加し今後の学校生活の中で焦らず慎重に考え、悔いの無いように過ごしたいと思った。福祉というものは、とても広く

深いと感じるが誰かを支援し、よりよいものにする事は変わらないので、私自身も根本の部分は変わらずそのまま他の部分は補いながら、前に進んでいきたい。この半年間で学んだ事は全て自分のためになると思うので今後これらを糧にしていきたい。

4. F19101 中村誠の役割

4-1 グループ内の役割

私たちの班は1月8日に行われた伊藤ゼミの活動報告会を進行係とともに運営すること。そして報告書のレイアウトを作成しゼミのメンバーに配布、その後ゼミのメンバーが書いた活動報告書を回収、添削し、製本することであった。私たちの班では役割分担をはっきりと決めず、三人で話し合っただけで協力し班としての役割をこなしていた、と私は考えている。こうすることによって、三人の中での仕事を均等にすることができ、一人に負担がかかるということがなくなった。また人任せにすることがなくなり、全員が今どのような作業をしているのか把握しているため、お互いにアドバイスしやすくなり、結果として作業が効率的に進んだと感じた。その中でも私個人で行った活動として、パワーポイントの作成や伊藤先生との連絡係が挙げられる。これらの活動を通してどうすれば聞き手に情報がうまく伝わるスライドを作れるか試行錯誤する、というこれからの学生生活で役に立つ能力を向上させることができ、目上の方に対する連絡やアポイントメントの取り方といった社会に出た時に必要になる能力を身に付けることができた。

4-2 グループ活動を通して

私が報告会担当を希望した理由として、後期

ゼミの集大成となる活動報告書を作り上げ、その報告書が多くの人に読んでもらえることを光栄に思ったからである。その分活動報告書を作るという責任は重く感じた。私は幼いころから一人で考えすぎる癖があり、人に頼ることが苦手であった。ただ今回のグループ活動を通して、仲間と協力することで新しい考えが次々に浮かんできたり、自分の作ったパワーポイントが分かりやすい構成になっているかを発表前に確認出来たり、様々な点でメリットが感じられた。そして報告書を完成させなければならないというプレッシャーと一緒に背負って頼りあえる仲間がいたということが何よりも心強かった。

またグループ活動を行う際の伊藤先生の方針としては「自分たちが楽しいと思えるものにする」ということだったので、かなり自由に活動することができた。高校生時代は先生の指示通りに行動し、困ったことがあったら先生に頼っていればよかったが、大学でのグループ活動は自分たちで考えながら進んでいかなければならず、今までよりもレベルアップした活動であったと考える。

そして私たちは「伊藤ゼミらしい報告書」という目標を掲げた。先生からアドバイスをいただいたり、前年の例を参考にしたりして報告書の原案を作成してゼミのメンバーに報告書のレイアウトを配った。この時私はレイアウトを配ればその通りに作ってくれるだろうと勝手に解釈し、細かな指示を伝えることがなかった。これがグループ活動の中で最も反省しなければならないことだった。実際ゼミのメンバーから活動報告書を回収すると、書式を変えて作成している人がおり、結局私たちの仕事が増えてしまうことになった。今回は私たちが直せば済む問

題であったが、今後より大きな仕事を任されるようになれば、報告・連絡・相談の重要性が高くなるため、今回の反省を生かして今後は細かな指示と疑問な点がないか確かめるということを徹底していきたい。

4-3 半年間の学びの概要

伊藤ゼミとして初めての活動は国際福祉機器展の見学であった。私個人としてはC-FREXという脊椎損傷者が身体機能を維持するために用いる歩行器具に注目し見学をした。国際福祉機器展に出展されている福祉器具はどれも高性能で、「障害を持った方々を支えたい」という真心を感じた。

次に無言館見学を行った。戦争で命を失った学生が生前に作成した絵や彫刻が数多く展示されていて、その一つ一つに戦争という悲惨な歴史に巻き込まれ、夢半ばに散っていった学生の悔しさ、怒り、悲しみが伝わってきた。また「上田市にある無言館を他の地域に住む人に伝えられるようにする」というもう一つの目標についても達成でき、むしろどんどん発信して戦争が二度と起こらないようにしなければならないと思った。

そしてベルポート丸子での実習を行った。特別養護老人ホームで実習するのはこれが初めてで、分からないことばかりであったが職員さんを頼りつつ、私たちの実習内容であるたこ焼きづくりを成功させることが出来た。またベルポート丸子で取り入れられているユニットケアについて学び、その利点や現状抱える問題について考えることができた。

地域活動では別所温泉付近を聴覚障害者が観光したらどのような危険があるのか、観察者の立場で考察を深めた。車通りの少ない道ではあ

ったが、後方から接近する車に追い越されるまで認識できない場面があり、聴覚障害者が抱える悩みを実際に体験することでリアルに感じる事が出来た。

ゼミの企画として行われたクリスマスケーキ作りでは普段ゼミの中で交流がないメンバーとも協力してケーキを作成した。自分の得意な仕事と苦手な仕事を把握し、分担することで、見た目も味も満足のいくケーキを作ることが出来た。

最後に行われた報告会では各班が後期ゼミで行ってきたグループ活動について振り返り、個人で感想を述べた。私たちの班は活動が報告会の時期に集中したため、発表内容としては薄くなってしまった。他の班の報告を聞き、どの班も見えないところで様々な苦労や努力があったことが分かり、自分も良い報告書を作成できるように努力しなければならないと強く感じた。

4-4 半年間の学びの感想

伊藤ゼミは学生主体で動いていたため、どの活動も楽しく行うことが出来た。それだけでなく「福祉」を学ぶものとして知っておくべきものであったり、心がけなければならない考え方があったりを学ぶことが出来たのでとても有意義なゼミ活動であったと感じた。これらの活動が出来たのもゼミの皆が計画を立て、事前準備行ってくれたおかげであるので、感謝しなければならないと感じるとともに、今まだ私が行ってきた学習についても同様に多くの人が事前に準備を行ってきてくれたからであるため、日々学べることは有難いことであると半年間の学びを通して気づくことが出来た。

私は現在具体的なキャリアデザインを持っていないが、半年間を通して何度も「福祉」の奥深

さや難しさを実感し、より興味を持つようになった。これからの学生生活を通して自分が楽しいと感じられるものが何なのか見つけていきたい。

参考文献リスト

1) 大森康文 『学生のための思考力・判断力・表現力が身に付く情報リテラシー』

2019年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「ベルポートまるこ」担当

F19079 鷹羽里奈

F19087 谷口宝穂

F19123 細木辰哉

1. グループ活動の概要

● 実習計画

- 10/8 伊藤先生との面談（今後の見通し）
- 10/17 伊藤先生との面談（事前学習の確認）
- 10/23 事前学習
 - 日程の確認
 - ベルポートまるこについて
 - 班ごとの自主学習
- 事前実習
 - 担当ユニットでのアセスメント 11/20
 - の実習内容の吟味
- 11/6 実習に向けた準備1
- 11/8 各班の実習計画作成
- 11/13 実習に向けた準備2
- 11/14 ベルポートまるこ東との面談
- 11/20 実習
- 11/21 お礼状作成
- 11/27 報告会
- 12/4 報告書作成

● 事前学習について

事前学習として、実習の日程の確認、ベルポートまるこについての学習を行った。とくにベルポートまるこ東の特色である、ユニットケアに重点を置いた。

反省として、特別養護老人ホームの利用者の症状認識が足りず、事前学習の甘さを感じた。利用者の症状認識に関して、担当班から情報を発信す

るだけでなく、ゼミの生徒が主体的に調べ、考える時間を設けるべきであったと考える。そういった時間を設けることで、コミュニケーション方法がわからないといったような問題点は少し改善されていたのではないだろうか。また、台風の影響で事前学習が遅れ、事前学習の時間が少なくなってしまったが、担当班が資料を作り配布するなどの配慮が必要であったと考える。

● 10/23の実習について

ゼミのメンバーからの感想として、「ユニットケアは職員と利用者のつながりを強くし、家庭的な温かい雰囲気を生み出していた」、「利用者が過ごしやすい環境を作り出すといった利点があることも強く感じられた」、「会話をすることは難しかったが、反応を返してくれてうれしかった」というものが多かった。その一方で、「コミュニケーションをとることが難しかった」「会話が続き、どのようにしゃべりかけたらよいかわからず、しゃべりかけることができなかった」というものもみられた。

実際にユニットケアというものを実感することができ、2回目の実習に向けてより具体的なイメージを持つことができたと思う。コミュニケーションが取れない場合も、生徒から積極的にかわらなければ何も始まらないことを痛感したであろうと思う。

● 11/20の実習について

ゼミのメンバーからの感想として、「利用者の方に楽しんでもらえた」、「臨機応変に対応して実習を成功させることができた」、「前回の実習の反省を踏まえて、積極的に行動することができた」という意見が多かった。また、多くの学生が「来年の実習に活かしていきたい」と前向きな姿勢で今回の実習を終えていた。その一方で、「時間の調節がうまくいかなかった」、「長くて疲れてしまったり、飽きてしまったりする利用者の方がいた」、「施設の方に頼ってしまうことが多かった」という意見が多かった。

レクリエーションを行うにあたり、利用者のできること・できないことを把握し、必要な支援を見極めることが大切であると感じた。また、レクリエーションの企画・進行をする側が楽しむことで、利用者も楽しんでもらえるということを学んだ。学生からの感想の中で「施設の方に頼ってしまった」という反省があったが、ベルポートまるこ東のようなユニットケアの施設では、施設の方の支援なしではレクリエーションを成功させることは困難であると考えた。そのため、施設の方に頼ることは必要であると感じた。

● 報告会について

実習後に、報告会を行った。各班、10分内で実習内容を報告してもらう時間を設け、すべての班がパワーポイントによる発表を行っていた。スムーズに報告会を終えることはできたが、質疑応答が少なく、活発的なものにすることができなかった。改善点として、少なくとも一人は、報告に対する感想・意見を求めるべきであったと感じた。

2. F19079 鷹羽里奈

2-1 グループ内の役割

私はベルポートまるこ東実習にあたって、特別

養護老人ホームとは何かの事前学習の準備、各班の実習内容の調整を行った。

特別養護老人ホームの事前学習においては、パワーポイントを作成し、ゼミのメンバーに説明をした。その際に、ベルポートまるこ東の特色のひとつである、ユニットケアに重点をおいて説明を行った。

各班の実習内容の調整においては、事前訪問ののちに班ごとに考えた実習内容を伊藤先生やベルポートまるこ東と吟味し、計画を作成した。実習の際に必要な物を、個人で用意できるもの、大学に支給してもらうもの、施設にお借りするものにおいてリスト化し、タイムスケジュールを作成したうえで、ベルポートまるこ東に伺い、説明をした。その結果得たご意見、注意事項などをゼミのメンバーに連絡し、実習の前日には再度確認を行った。

2-2 グループ活動を通して

実習では「その人らしさ」を大切にされたケアを実感した。ユニットケアは10人程度の利用者で1つのユニットを結成し、担当職員は細やかな利用者の情報把握が可能になること、利用者は人とのつながりを感じながら生活できることが利点としてあげられる。実際にユニットにお邪魔して、利用者の方や職員の方とのお話しを通して、アットホームなあたたかな雰囲気を実感した。また、できることは自分でやってもらう、たとえば洗濯物をたたんでもらうといった1人1人の役割があることで、その人がそこにいることの価値を認め、その人の居場所づくりにもなるということを学んだ。私たちの班の実習内容は、利用者の方の誕生日会として、利用者の方とフルーチェづくりをすること、レクリエーションをすることだった。バースデーカードなども用意し、誕生日会を成功

させることができた。当日の利用者の方の様子を見て、レクリエーションは中止にしたが、そのように臨機応変に対応することが日々求められるのだと感じたし、対応の選択の幅を広げるためにも、知識と経験が必要であると感じた。また、フルチェづくりからは、衛生管理の徹底と、誤謬・誤飲対策の重要性を実感した。

活動の評価では、どの班も実習を成功させることができたこと、利用者の方に楽しんでもらったことが良かった点だと思う。一方で、事前学習の甘さが反省点としてあげられる。ゼミのメンバーのレポートに、「コミュニケーションが困難な方とのかかわり方がわからなかった」、「利用者の方に合わせたレクリエーションを実践するのが難しかった」、「食べ物にこんなにも気を使っているとは思わなかった」といった感想が多くみられた。これは、事前学習で、特別養護老人ホームを利用なさる方はどのような症状の方がいるのか、高齢者とのレクリエーションにはどのようなものがあるのか、といった学習が足りなかったからだと感じた。台風による休講などで事前学習の時間を十分にとることはできなかったが、資料などにまとめて配布するなどの工夫が必要であったと感じた。実習を充実させるためにも、事前学習の重要性を改めて学んだ。

2-3 半年間の学びの概要

● 国際福祉機器展見学

国際福祉機器展での見学をもとに、電動カーレンタルサービス、移動機器についてのレポートを作成した。電動カーの走行距離は10～25kmであり、小回りもきくことから、中断間地域での高齢者の通院といった外出に適していると考えられる。さらに最高時速は6kmで、二輪車よりも安定性が高いこと、使用前には安全指導もされていることから

安全性の高い移動手段といえる。一方で、介護保険適用外の人にとっては金銭面的に厳しいものがあると感じた。地域によっては自治体が主体でこのサービスと連携を行い、電動カーのレンタルを行っている例もある。今後、このような動きが全国に広まっていくことを期待したい。

● 無言館見学

無言館は戦没画学生の作品を展示した美術館である。多くの作品が展示されており、私たちとそう年が変わらない学生が戦争で命を落としたと知り、言葉を失った。平日にも関わらず多くの方が訪れており、戦争を後世に伝える必要性を強く感じた。

● 特別養護老人ホーム（ベルポートまるこ）実習

班でこの実習を担当した。事前準備、施設と学生の連携を行い、ユニットごとに実習も行った。施設で実習するということになると、事前に何度も打ち合わせを重ねなければならず、想像以上に大変だった。また、事前学習の甘さも感じられ、担当としての準備不足も痛感した。実習については、臨機応変な対応をすることができ、無事に成功させることができた。ユニットケアの強みである人とのつながりを大事にした支援、特別養護老人ホームを利用している方とのかかわり方について多く学ぶことができた。

● 社会福祉基礎実習報告会見学

先輩方の実習報告会に参加した。自治体が連携して福祉を行っているという印象が深かった。中でも福祉のワンストップサービスという概念を初めて知り、興味を持った。また、先輩方の話を聞いて、実習計画を立てる際に明確な目的意識がないと、実習が中身のあるものにならないということ学んだ。目的意識が明確にされていれば、

実習の際の行動の指針にもなるし、振り返りの際も問題点、成果を上げやすく、次につなげることができるものになると思った。

● 地域活動

別所温泉を障害者の体験をしながら回った。私の班内での担当は観察者だった。私の班は視覚障害の担当であったが、視覚障害の方が観光を楽しむとなると、様々な困難があるということを実感した。しかし、視覚障害者のために点字ブロック、手すりをむやみに増やしてしまうと、景観を損なってしまうたり、車いすの人にとっては逆に利用しにくい道になってしまうりする。ノーマライゼーションな環境を整えていくことの難しさというものを感じた。

2-4 半年間の学びの感想

半年間の学びで、主に二つのことを学んだ。一つは実習を計画、実行することの大変さ、もう一つは、高齢者、障害を持った方とのかかわり方だ。

ベルポートまるこ実習の際に、担当班であったため、様々な準備をした。その中で、二回の実習のために施設と何度も打ち合わせをしたり、事前学習の重要性を実感したりした。今回初めて、私たちが主体となってゼミ活動の細かい進行を行った。そのため、先生に声をかけられてから行動することが多く、自分から計画性を持って取り組むことができなかった。今後は基礎実習などもあるため、何事にも長期的な見通しを持ちながら取り組んでいきたい。

ベルポートまるこ実習、地域活動を通して、高齢者の方・障害者の方とのかかわり方について学んだ。ベルポートまるこ東は特別養護老人ホームであったため、コミュニケーションをとるのが難しい方もいたが、動作や視覚情報といった言葉以外のコミュニケーションが有効であると感じた。

視覚障害の方の援助では前に立ち、利き手で援助者の肘あたりを持ってもらうという援助方法を学んだ。今後もボランティアなどさまざまな人と関わる機会があると思うが、今回の経験をいかながらよりよいかわり方を目指していきたい。

3. F19087 谷口宝穂

3-1 グループ内の役割

今回のベルポートまるこの実習において、私が担当した仕事は事前準備、事前準備から報告会までのタイムスケジュールの作成、領収書の集計である。

事前準備において、実習で使う予定のあった道具の作成、ベルポートまるこで作るフルーチェの試作、フルーチェの試作段階での問題点の洗い出しと解決策の立案、そして、ゼミの生徒を対象にしたベルポートまるこについての事前学習などを行った。

事前学習から報告会までのタイムスケジュールでは、台風の影響で事前学習の日が変更になってしまったが、スケジュールグループで話し合い、スケジュール変更をスムーズに行うことができた。

領収書の集計では、ゼミの生徒から領収書を回収し、Excelの数式機能を使用して、各班の合計金額を出し、伊藤先生に提出した。

3-2 グループ活動を通して

今回のグループ活動で特に学んだことの一つに「学生が主体的に、それぞれ役割を持って行動する」ということが挙げられる。大学入学までの学習の中でもそれぞれが役割を持っており、主体的に行動していたように感じていた。しかし、今回のベルポートまるこのグループ活動を行って

みて、今までは教師の力を借りながら、責任感が少ない中で活動していただけであったと実感した。現在までの生徒主体の活動を思い返すと、教師が事前に施設に連絡し、生徒が行うことの概要を明かにしていた。また事前学習の段階で施設についての説明があり、その施設の概要や利用者の方の様子などを知識としてインプットすることができた。しかし今回のグループ活動では、事前学習の部分から生徒が主体となって行った。台風の影響で事前学習が遅れるなど、限られた時間の中ではあったが、グループ内で情報を共有し、実習を終えることができた。施設と連携する中での活動であったため、責任感が強まり、やりがいがあり多くの学びを得たグループ活動であったと考える。

実習では「一人一人への支援」を大切にしたいケアを感じることができた。ユニットケアは10人程度の利用者で一つのユニットを結成し、ユニットごとに決まった職員が交代で介護にあたっていた。少人数のユニットに担当職員が付くことで一人一人の利用者の情報がより詳しく把握できるため、細やかな支援ができるという利点があげられる。実際にユニットに入り、利用者の方と職員の方の関係性を見ると、利用者の方は職員の方を信頼しており、職員の方は利用者の方を尊重しているような雰囲気であった。利用者の方の様子を見てできる範囲の活動を利用者の方にしてもらうことで、利用者の方一人一人に対する支援が行われていた。またユニットで分かれているので、どのような支援が必要かを担当職員全員が把握しており、職員が交代しても問題なく生活できていた。これはユニットケアの大きな強みであると考える。

3-3 半年間の学びの概要

- 国際福祉機器展見学

国際福祉機器展で見学したトーキングエイドプラスというコミュニケーションの福祉機器に関するレポートを作成した。トーキングエイドプラスの対象者は発語が困難な人であるため、高齢者から幼児まで幅広い層の人が使用可能であるという。対象者が幅広いという点で、福祉機器は高齢者や障害者のためのものという固定観念を打ち崩すきっかけとなる福祉機器となるであろうことを期待している。

- 無言館見学

無言館は第二次世界大戦で戦没した画学生の作品が展示されている美術館である。第二次世界大戦中の話は何度も聞いたことがあったが、実際に死を目前に実感した学生の作品を見て、改めて戦争について考えさせられた。学生たちの夢と目標に満ちた未来を二度とつぶさないためにも、戦争の悲劇を後世に語り継がなければいけないと強く感じた。

- 特別養護老人ホーム(ベルポートまるこ)実習

ベルポートまるこ実習について私たちが担当した。事前学習や事前準備など、リーダーが先生と綿密に話し合い、グループ内で話し合いの内容をもとにゼミの生徒に連絡すること、授業の進め方を決めた。各班の実習の感想を聞くと、事前学習の甘さや準備不足が感じられた。しかし、自分の班含め実習では臨機応変に対応でき成功させることができた。ユニットケアでの支援を実際に入って学び、支援のあり方の多様性を学んだ。

- 社会福祉基礎実習報告会見学

先輩方が行った自治体実習の報告会を見学した。どのグループも高齢化が深刻な問題となって

いる自治体への実習であったため、自治体が積極的に福祉サービスに関わっているように感じた。実習に参加する一人一人が明確な目的意識を持つことで、中身のある実習になると先輩が言っていた。明確な目的意識を持つことで、自分たちの実習の反省点や問題点、今後の自分たちの活動内容などについて詳しく振り返ることができると考える。

● 地域活動(別所温泉・視覚障害)

別所温泉を視覚障害者のガイドとして歩いた。障害のない人へガイドするのは違い、足元に気を配る、話し相手になる、手すりにつかまらせるなど、一人で二人分の安全面に気を使っていた。また体験者も音に敏感になるなど、普段とは異なる様子を見せていた。少しの坂道でも不安そうな声を出しており、視覚障害者が日常生活で抱える問題を考えるきっかけになった。視覚障害にも差はあると思うので、実際に体験してみるなどして日常生活の問題点と改善策を見つけていきたい。

3-4 半年間の学びの感想

半年間の学びで、私は二つのことを学んだ。一つは主体的に活動することの難しさと大変さ、もう一つは障害者への支援のあり方である。

ベルポートまるこの担当班であったため、事前準備、事前学習の準備、経費の集計など、ほかのグループが集中して実習に力を入れることができるように企画・進行を行った。自分たちもユニットの企画を進めながらであったため、学生主体ではあったが先生に促されて動くことが多くなってしまった。実習では学生が考えて動くことが求められる、そのためにも主体的に動くことを意識して活動したい。

別所温泉を視覚障害の体験をしながら歩いていた際、まっすぐ歩くことが困難で、縁石にも気

づいていない様子うかがえた。別所温泉には点字ブロックがほとんどなく、音と人との声の距離でどうにかまっすぐ歩いているように感じた。少し前に立ち、先導する形で歩くなど、障害者が歩きやすいように歩くことを意識した。また、歩く際の不安な気持ちを紛らわすためにたくさん話しかけるようにした。今回の活動を通して、支援のあり方は多様であると感じた。そのため、今後参加するボランティア活動やゼミ活動の中で障害者支援について詳しく学んでいきたいと考える。

4. F19123 細木辰哉

4-1 グループ内の役割

今回、ベルポートまるこの実習において私が担当した仕事は事前準備、各授業の司会、各授業におけるレポート用紙の作成、そしてお礼状の作成である。

事前準備においては実習中に使う道具や施設の利用者さんのお誕生日カードの作成、そしてベルポートまるこについての事前学習などを行った。

各授業の司会では事前学習におけるの進行や最後の実習発表会の司会などをおこなった司会進行では各授業の事前に班のみんなでコミュニケーションを取り合って迷いなく行うことができた。

レポート用紙の作成では事前学習で使うものと実習後のもの、二通りを作成した。

お礼状の作成では前期で学んだコミュニケーション技法を元にお礼状を書き郵送をした手紙の中の言葉遣いなどを身につける良い機会になった。

4-2 グループ活動を通して

ベルポートまるこ実習を通してグループ活動では様々なことを学んできた中でも私が特筆したい部分は大学ならではの主体的な行動や自分の行動に責任を持たないといけないことである。もちろんこれは高校の時でも感じてきたことであるが、大学のゼミというものはそれをより意識することが多かった。ベルポートまるこ実習の事前授業でいうとゼミのメンバーにまるこについて知ってもらう必要があるため事前学習の資料、パワーポイントなどを作成することである。これは、限られた授業数の中でよりよい実習になるようにやらなければいけない大事な作業であり、このゼミでは担当した実習までの時間は自分たちで授業内容を考えなければならぬのである。自分たちで授業を進行するということはとても大変であり、またやりがいのあるものであった。

また、ベルポートまるこ実習ではユニットケアを採用しておりその中に我々大学生が入っていくという形で実習を行うためレクリエーションを行うには、皆、消極的になってしまうということが当初、課題として上がっていた。これを緩和するために私が取り組んだことはとにかく事前学習においてベルポートまるこについて知ってもらうことである。そのため私は実習レポートにベルポートまるこについての設問を用意することにした実際にどのようなものかという福祉小六法を使いまるこの施設法を定義するものや施設の概要などを調べるものである。これは予想以上にみんなよく調べており、積極的に活動できたといえるであろう。ひとつ残念な点があるとするならばユニットケアというワードについてわかっていないひとが多く見られたので調べ学習にてユニットケアについて誘導すればよかったという点である。

ベルポートまるこ実習を通して様々なことを体験したがやはり一番感じたことは責任と自主性である。今後もこの教訓を胸に頑張りたい。

4-3 半年間の学びの概要

後期の実習内容について振り返ると様々なことを体験してきた。そのひとつひとつを振り返っていきいたいと思う。

まず初回授業の国際福祉機器展見学では様々な道具や企業を見学することができ自分の中の福祉に対する職の意識や義足を見学したことにより仕組みや相場、保険などの関係を学ぶことができより自分の中の福祉の視野が広がった。

無言館見学では、戦没画家の絵を見ることにより戦時中の思いを感じることや当時の福祉感などを勉強することができた。

特別養護老人ホーム（ベルポートまるこ）事前学習と特別養護老人ホーム初回見学では初めての实習でありまた自分が担当する企画でもあったので一番濃い学びをすることができた。初回ということもありぎこちない実習になったが積極的な姿勢になることが大事だということを学ぶことができた。

社会福祉基礎実習報告会見学では先輩方から自分も体験するであろう実習について多くのお話を聞いた交通手段の話や自分にあった実習を選ぶことまたその地域の福祉がどのようなものになっているのかしっかりと観察することなど様々な話を聞きこれからの実習に対する勉強がよくなった。

特別養護老人ホーム企画に向けた検討～特別養護老人ホーム企画実施においては自分が担当したものでありレポートの作成から企画検討、事前の準備活動など様々なことを自主的に行うことができた。当日の活動には参加できなかったが

自分が作成した誕生日カードは利用者さんに喜んでいただけたのでよかった。またお礼状を書くことなど社会人になってから行うスキルなども身につけることができた。

地域活動では実際に白内障について身をもって体験し、別所温泉のバリアフリーから観光について観察や考察をした。実際、白内障を体験することは貴重なことであった。

このように後期は充実した内容の体験や実習をすることができた。この講義で得た様々な体験をこの後の活動に生かしていきたい。

4-4 半年間の学びの感想

この半年に学んだことはたくさんあるがなかでも一番良い学びの場となったのは自分が担当したベルポートまるこの学習である。

ベルポートまるこの学習では大学生ならではの積極性と責任感ということをとて感じる学習となった。例えば、実習をする上でみんなが興味を持ってくれるように資料を自分たちで作ることなど自分たちで進んでやる場面がたくさんあった。これらは社会にでてからも意識しなければならない大事なスキルである。また、グループ活動においては仲間とコミュニケーションをとりながら行う活動も多々ありこれによりコミュニケーションのスキルや仲間意識により協調性を養うことができた。

自分は心理学を専攻しており、将来のキャリア像としてまだはっきりと目指すものが決まっていないがこの半年の学習で社会人としてのスキルを身につけるとともに福祉の仕事の視野の幅や福祉的な視点で物事を見るスキルなどを身につけることができた。この学びを忘れずに今後の大学生活を豊かにしていきたい。

参考文献リスト

<http://daijukai.or.jp/maruco.html>

2019年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「進行」担当

F19091 長井暖果

F19100 中村あい

F19139 村田広洋

1. グループ活動の概要

私たちは、進行係としてゼミを牽引する役割を担った。主に日程管理を行った。各班の時間割作成では、後期の日程を板書し皆に分かりやすいよう示した。板書では、チョークの色を変化させることにより日程をより理解しやすく工夫を凝らした。皆の意見を取りまとめ、皆の意見が反映されるように日程を組んだ。

報告書の締め切り設定・調整では、報告会系の負担を加味して、締め切りの日程をそれぞれ分けた。場所取りは、12月18日に行われた企画系の企画時に使用する教室、場所を確保した。

報告会では、まず報告会本番に向けて報告会で必要なものややるべきことを先生と打ち合わせした。その他にも、各活動でお世話になった方々を来賓としてメールを送り、招待し、報告会をご覧いただけるようにするなどのことも行った。更に、招待するにあたり何時ごろにどの班の発表がされるのか、把握しやすいようにタイムスケジュールを作成し、添付してメールを送った。報告会前日では、報告会で発表するときに使われるパワーポイントのデータなどを回収し、報告会当日にスムーズな進行が行えるよう配慮した。報告会当日では、パソコン、パワーポイントのセッティングだけでなく発表中の時間配分が分かりやすいよう実習室でベルを借りるなどして時間調節しやすい工夫も行った。

反省点もあった。

まず、声掛けが足りなかった。

全体の流れを把握し、スケジュールを立てることはできたが、締め切り日などの声掛けを何回か行うべきだったと思った。

次は、報告会との連携不足だった点である。

報告会の締め切り日設定は初期の段階に行ったこともあり、報告会係側との連絡がうまく取れていなかった。締め切り日はこれでいいのか、見直すべき点はないのか話し合っておけば更に円滑に進められたのではないかと思った。

そして、グループラインでの投げかけ不足である。グループラインをうまく活用するべきだった。声掛けをしつつ、更にグループラインで呼びかけすることで記録にもなり、いつでも皆が把握できるようにするなど工夫をしていかないといけないと感じた。

最後に急な変更に対する連絡、調整不足である。休講になった際に進行係の活動内容を把握していなかったこともあり、連絡・調整がうまくいかなかったことがあった。

急な変更に対応することができるよう、迅速に変更点を知り、確認し、全員に伝えるようにできなければいけないと思った。

良かった点は、先を見通した活動、緻密なスケジュール管理、係内連携、チームワークである。あらかじめ決めたスケジュール以外にも各

係にゼミ全体への連絡をしてもらうように時間を有効に利用できた。

ここからは自分たち以外の活動を把握することは円滑な進行に必要であるということが学べた。

2. F19091 長井暖果

2-1 グループ内の役割

進行係として、私は主に全体のスケジュール調整を行った。それぞれの班がどの駒を使用し、何を行うのかを把握し、表を作成した。後期のゼミはこの表に沿って、進行係は各班に呼びかけることができた。

しかし、この表はこのゼミが活動する初期の段階で作成していたため、途中ずれが生じることもあった。この班がこのコマを使うというようにスケジュールを立てていたため、時間が余ったり、次のコマまで入ってしまったりすることもあった。時間が余った場合は他にコマを使いたい班がいるか呼びかけたり、次の準備等に切り替えるようにしたりした。逆に、次のコマまで使わないといけないようになった際は、次にコマを使う予定だった班や全体に呼びかけ、全体的な連絡や調整を行った。

進行係は、全体を通して班全員で行動することが多かったため、あまり個人としての活動内容は多くなかった。しかし、個人としての活動を行う際は3人それぞれ役割分担を行い、効率的に進行係としての役割を果たすことができた。

2-2 グループ活動を通して

進行係は、主にスケジュール管理を行った。初期に行ったゼミのスケジュール管理では、黒板に大まかにこれから行う活動内容、そのために必要な準備期間やそれを担当する班を板書した。そし

て、それぞれが確認しやすいように色を変え、視覚的に把握しやすいようにした。それを、写真や紙媒体にも残し、いつでも確認できるようにした。いつでも確認できるようにしたことで、何か変更があった際や他の班から確認があった際にすぐ対応することができた。すぐに対応することができるといことは、無駄な時間が無くなり、スムーズに進行することができるのだと改めて学んだ。スケジュールを常に把握しておくことで、事前に呼びかけることもできた。

また、報告会に関する仕事も進行係の仕事の1つであった。報告書の締め切り設定では、報告会係の負担が少しでも減るように注意した。無言館やベルポートまるこなど早期に終了している活動班は、早めに締め切りを設定し、企画や地域活動班など、比較的遅めに活動が終わった班は冬季休暇中に報告書を作成できるように締め切りを設定した。特に、冬季休暇中にレポート提出のある班は提出を忘れないように、暮らすラインで締め切りの確認、呼びかけを行った。報告会は、伊藤ゼミでお世話になった方々への活動発表の場であるという考えから、ベルポートまるこの方や上田市の環境課の方にメールを送り、報告会を行うことの告知を行った。

グループ活動を通して、個人の役割分担を行うことが必要だと改めて感じた。グループで活動するには、個々がそれぞれの役割を遂行することで効率よく、仕事しやすくなる。情報共有、それに基づいた発信を行うことができるようになると感じた。

2-3 半年間の学びの概要

無言館訪問では、戦時中に美術学生だった、または目指していた方々の作品を観察し、感想を書いた。

特別養護老人ホームベルポートまるこ訪問、見学は2回行った。1回目は、ベルポートまるこという施設の概要、2回目にレクリエーションを行うユニットの概要説明、見学を行った。全ユニット個室対応であり、ユニット、個室の雰囲気もそれぞれ違った。レクリエーションに必要な利用者の情報や普段行っているレクリエーションの内容などの情報を収集し、次回の見学時のレクリエーション実施のために役立てた。2回目は、1回目で収集した情報をもとに、新聞紙を用いた玉入れを行った。新聞紙は柔らかく、麻痺があっても握りやすい素材であると考え、使用した。1回目に職員から、このユニットは歌を歌うことが好きな人が多いという情報を得ていたため、歌詞カードを作成し、歌を歌った。予定よりも時間が巻いてしまい、時間が余ってしまった。

地域活動では、上田城・別所温泉駅の2チームに分かれてバリアフリーの検証を行った。私たちは上田城で、車いすが割り振られた。上田城は、上り、下りともに坂が多く、車いすを自分の力だけでこぐのはかなり大変であるという気づきを得られた。また、自分の身体が乗っている車いすをほぼ腕力のみで動かさなければならないということもあり、腕が疲れてしまい、1人で上田城を観光するのは大変だと自分自身が身をもって体験した。

企画では、3チームに分かれて「クリスマス」というテーマ設定の下、競い合った。実習室、教育支援課の方を審査員として呼び、クリスマスケーキを審査してもらった。自分たちが納得のいくケーキを作り、それぞれの努力をたたえ合うという熱い企画になった。

報告会では、報告会のタイムスケジュール作成、来賓に対するメール作成、パワーポイント作成を

行った。

2-4 半年間の学びの感想

この半年間、伊藤ゼミの活動を通して進行係としての役割や、他の活動班の活動に参加する中で、自分の役割を持ち、それを遂行することの難しさを学んだ。進行係は、全ての活動日やその内容を把握し、それがスムーズに進行するようにする係であった。他の班のように施設見学のために何かを準備し、企画、運営するという係ではなかった。そのため、このゼミでは一体何をすべきなのか班員や先生と話し合った。その中で、自分がすべきこと、他の班に頼むことが見えてきた。自分ですべてを行うのは、大変だが楽である。しかし、グループ活動は皆で協力して行う必要がある。いかに協力し、作業を分担するかが大切であると学んだ。

私は、将来高齢者や障がい者、地域全体を支える社会福祉士になりたいと考えている。社会福祉士も医療、保健、福祉などの多くの多職種間と連携してクライアントを支援する職種である。このゼミ活動で協力する大切さ、難しさを学んだと思う。

3. F19000 中村あい

3-1 グループ内の役割

私は進行係として、役割分担は明確には決めていなかったが、ゼミ全体の進行とゼミで行う活動の把握、日程調節を行った。

ケーキ作りのレクリエーションでは教室の確保をするため、学生支援課で教室の予約を行った。

報告会ではタイムスケジュールを作成し、来賓の方がいらっしゃったときに報告会の進行具合を把握しやすいようにした。

報告会は司会進行も務めさせてもらったため、

各活動で御世話になった方たちを来賓として招待したり、発表前のパソコンやパワーポイントのセッティングを行ったりした。さらに、報告会で発表するデータの回収や締め切りの設定など、それぞれの班にあった締め切りの期間を設定した。報告会で使用するベルは事前に実習室で借りて置き、報告会の時間調整を行いやすいようにした。スムーズな進行が行えるようさまざまな工夫をした。

3-2 グループ活動を通して

進行係を務めさせていただき、様々な経験をすることが出来た。まず、進行係ではゼミの中のゼミ長グループということで、ゼミ全体をまとめ、引っ張っていくという役割があった。そのため、上記で述べたように活動する場面はいくつもあり、事前に三人で打ち合わせを行い、場面ごとに進行を行う必要があったように感じられる。

まず、最初の活動は日程調節であった。日程調節では後期のゼミ全体の流れを黒板に記載し、報告書やレポートなどの提出期限を各班にあうように指定した。その際、全体的に先を見通すことが出来なく、後々に変更内容が出たり、急な連絡をすることになったりしてしまった。さらに、授業が時間より早く終わってしまったときに、余った時間をほかの班に回すことが可能であったが、事前にこのような事態が起こるということを想定していなかったために、臨機応変な行動が出来なかった。そのため、早めに授業を終わらせて、時間の有効活動が出来なかったように感じられる。事前に考えて先を見通す行動が必要だと学んだ。

次の活動はレクリエーション時の教室確保と来賓の方の招待であった。教室の予約は早めに行動することが出来た。来賓の方の招待は、進行係

の役目と思い、行動したが、企画係が行ってくれていたため、必要がなかった。係と係の連携や打ち合わせも必要だと学んだ。

報告会では、報告会の司会進行という役目を報告会係にいただき、報告会のタイムスケジュールから日程までを作成した。タイムスケジュール作成は先生との打ち合わせなどによって改善することもできた。しかし本番では、タイムスケジュール通りに進むことが出来なかったため、タイムスケジュールを見て来てくださった来賓の方には、見たい発表を見せることが出来なかったと思われる。そのため、時間設定など、臨機応変な対応での時間調節などもできればよかったと学んだ。

発表中の時間調節を行うためのベルは実習室から借りたものの、終了三分前まで発表をする班がいなかったため使用することはなかったが、前持った準備はすることが出来たため良かった。

3-3 半年間の学びの概要

国際福祉機器展では、様々な福祉機器を見ることができ、障害を持った人だけでなく、子どもや高齢者の方にとっても生活しやすいようになる福祉機器がたくさんあった。その場で学んだことは、日本人だけでなく、外国人もたくさんいたことから、福祉とは世界で共通するものなのだということである。もちろん、様々な福祉機器を見ることによって、どのような人にどのような活用がされるのか、具体的に知ることが出来た。その利用が日本だけでされているわけではないということから、外国の福祉というものにも興味を持った。

無言館見学では、中学生の時も一度行ったことがあったが、大学生になってからもう一度行ってみるとやはり感じることは異なってくるように

感じられた。戦没画学生たちがどのような気持ちでこの絵を描いたのか、また、親族の方たちはどのような気持ちで無言館に画学生の絵を寄付したのか、深く感じる事が出来た。戦争というものがあるのか、どれだけの人たちの命、将来を奪っていったのか、生々しく学ぶ事が出来た。以上の学びから、私たちにできることは、戦争がもう起こることのないように、デモ活動を行うというわけではなく、戦没画学生の方たちが生きてかった今を生き、学べる事への感謝をすることなのだろうと考えた。

ベルポートまるこでは、特別養護老人ホームでどのようなレクリエーションをすることが可能であり、どのようにすれば楽しんでもらうことが出来るのか考えると同時に、学ぶ事が出来た。私たちは、新聞ボール入れと、歌をレクリエーションとして選んだが、新聞のボールを丸めることも、投げることも、歌うことも難しい利用者さんがいたため、本当にこのレクでよかったのだろうかと思まされる場面もあった。しかし、今までずっと動かなかった一人の利用者さんが、自分たちの声掛けで少しの行動を見せてくれた場面があり、その瞬間に無駄ではなかったのだと感じることができ、事前学習はもちろんのこと、利用者さんのことを知ることも大切なことなのだと学んだ。職員の方は利用者さん一人一人のことを知っているため、この人にはこのような支援が必要で、この人にはまた別の支援の仕方が必要であるということを理解している。そのため、どのようなレクリエーションが利用者さんにとって楽しいのか理解できるのだろうと考えた。

地域活動では、私たちの班は上田城での車いす体験を行い、私はガイド役を務めることとなった。車いすを押しながらガイドをするという両立は

とても難しいものであった。特に、砂利道では車いすのタイヤが埋まってしまう、進めることが出来ないという状況に陥ってしまうことにもなった。しかし、砂利道を通らなければ、写真スポットにたどり着くことが出来ず、車いすの方だけが楽しむことが出来ないという事態につながってしまうようにも考えられた。観光地であるため、どのような人でも楽しめるような環境であったらいいなとも感じた。車いす体験をした私たちにとっては、スロープや、側溝をふさぐものが必要であるなど感じられた。しかし逆に、スロープのある坂道では手すりがついており、スピードが出すぎないようにする配慮がされていたため、とても通りやすい道もあった。以上の学びから、障害を持った方たちが生きづらいと感じる場面はこの世の中いくつもあるのだと感じる。だからこそ、改善していくために様々な視点から見る必要があるのだと考えられる。

3-4 半年間の学びの感想

この半年間で福祉に関するだけでなく、様々な経験をした。私自身将来は福祉に関わる仕事や、村役場などに就けたらいいなと感じている部分があったため、とてもいい経験になった。車いす体験では障害を持った人たちの視点になって体験することでたくさんの発見をすることが出来た。他の活動でも同じように、視点を置き換えることで見えるものが違ってくるのだと学ぶことが出来た。私が将来なろうとしている職業が、福祉系のものであっても、公務員系のものであっても、どの職業でも、様々な角度からの視点は必要となってくるのだと感じた。今までの私は、今この現状である自分の立ち位置からしか物事を見ていないように感じられる。しかし、大事なことは主観的なものだけでなく、客観的なものであ

る場合もあるのだから、半年間で行った活動で身に着けた、様々な角度、視点から物事を見ていく力をいろいろな場面で活用していきたいと感じた。

4. F19139 村田広洋

4-1 グループ内の役割

半年間の進行係の活動の中で、役割というものは特に決めることはなかった。そのため、書くことがほとんどない。役割として任せられたことがほとんどないからだ。ひとつあげるとすれば、報告会のパワーポイントの原稿を1ページ分考えたことぐらいである。半年間の活動でよかった点の原稿を担当した。自分たちの良かったことを説明することは難しく、言葉を考えることが難しく感じた。パワーポイント自体と前半の原稿は全員で作っていたので各自後半の原稿を1ページずつ考えてくるだけだったのだが、自分の完成が遅くなり係に迷惑をかけてしまった。もう少し余裕をもって取り組んでおけば迷惑をかけずに済んだので、全体を考慮した行動をとるべきだった。係活動として与えられた役割はこのくらいである。係としては2回目のバルポートまるこ東の訪問の際のレクリエーションの準備を行った。

4-2 グループ活動を通して

進行係として半年間活動して、係としての反省点と良かった点から改善すべき所、維持すべき所を得ることができた。改善すべき所はもっと全体への連絡を多く取ることだ。台風の影響で締め切りの変わった提出物が発生したとき、進行係も連絡を回すべき所で行動ができずに調整が遅れてしまった。また、提出物の提出期限が迫ってきたときに進行係は期限を知っていることが多かったので担当の係とは別に提出を促す、または担

当係に期限の報告を促すように指示するなどの行動をした方がゼミの進行をより円滑にすることが可能だったであろう。維持すべき所は、常に先を見通した行動をすることだ。進行係としての活動をするにあたって、各係が準備を行えるようにスケジュールを組んだが、余った時間が出たときに次の活動がある係にゼミへの呼びかけを促したことで円滑な準備の進行に貢献することができた。先を見越すことは自身にも全体にも有益であると理解できた。

また、係の活動で知ったこととは別に個人的に学んだことがあった。それは“指示されてからする仕事はほとんどない”だ。今までは仕事は与えられるものであり、言われてから始めるものがほとんどであった。しかし、進行係になってから、自分に仕事を任せる人はいなかった。加えて、係として仕事を行ったのが係で集まって行う活動しかしていなかった。進行係が役割を決めていなかったこともあるが、役割を決めていないからと言って仕事がないわけではない。自分に仕事なかったのはほかの班員が率先して仕事を行っていたからである。用紙の作成、報告会の招待メールなどの業務を行ってくれていた。係として全員での活動は協力できたが、細かい業務には自分からという自主性がまだ身についておらず、班員としてあまり仕事ができなかった。大学生からは自分からという意志をもって活動に参加していくことが必要であることがこの半年間の活動によって学ぶことができた。得るものがたくさんあったこの半年間の活動は今後の大学生活を豊かにするものであった。

4-3 半年間の学びの概要

● 国際福祉機器展

後学期が始まってすぐに見学に行った国際福

祉機器展が最初の活動であった。班を決め、各自で見に行きたい機器を調べ、班員の見たいものを全員で回るといった内容だった。義肢からキッチンまで様々な機器を見学した。

- 無言館

戦没画家の作品が展示してある無言館を見学した。風景画や人物画、静物画などが展示されており、戦争を感じさせるものは当時の遺品のほかにはなかった。戦争の悲惨さを直接目にするには無言館内ではなかったが、こんな絵を描いている人の命が奪われたことに違和感を覚えた。

- ベルポートまるこ

特別養護老人ホームであるベルポートまるこで2回実習をした。事前学習では特別養護老人ホームの根底にある法律の調査と、今回の実習の目標を決めた。滅多にない機会を有意義にするため、見聞を広めることを目標に設定した。初回の訪問では職員の方に施設の案内やベルポートまるこの特色を教えていただいた。また、2回目の訪問の際に、こちらで考えたレクリエーションをしたいという旨の話をしたところ、細かい作業は難しいなどアドバイスをいただいた。利用者の方とも交流させていただいて、歌を聴かせていただいた。職員の方、一部の利用者の方も初対面の自分たちに親しく接してくださった。

2回目の訪問の際に行うレクリエーションは前回の訪問の時にいただいたアドバイスをもとに玉入れと歌に決めた。そのための準備として新聞紙と歌詞カードを準備した。当日は利用者の方と遊んで楽しんだ。時間の見通しが甘かったが職員の方の手助けで乗り切ることができた。見ることもなかった特別養護老人ホームの内実の一部を見ることができて、目標は達成された。

- 上田城散策

身体障害者と観光地を回る体験の散策で観察係として地図と危険個所の確認、現地での観察、記録をした。体験者にしか分からない箇所もあって新たな目線を知ることができた。

- ケーキ作り

3班に分かれ、ケーキ作りをした。当班は苺のサンタをあしらったケーキを作成した。全員で考え、一体となって作成を進めた。三者三様のケーキにそれぞれ賞が贈られた。

- 報告会

半年間の活動報告を行った。進行係としての活動、反省点、良かった点を発表した。ほかの係の活動に対する考えを知る良い機会だった。

4-4 学びの感想

この半年間の活動で、今まで体験したことのない活動をたくさん行い、思慮、協調性、自主性について知ることができた。無言館での思い、係での協力、自分にはできなかった自主的な活動。多くを行い、観察して気付くことができた。

また、自分の中で漠然としていた福祉というものに少し形をつけることができた。半年間の学びを活かしていきたい。

参考文献

ミーティングの案内メールの文例

(<https://bizushiki.com/meeting-annai>)

2019 年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）

グループ活動報告

「企画」担当

F19108 野川佳乃

F19133 宮坂つぐみ

F19145 吉田有咲

1. グループ活動の概要

まず、何を企画するのかを考えたときにリンゴ狩りかクリスマス会か焼き芋会という案が出た。リンゴ狩りは、奥原一貴さんのご家庭でりんご果樹園を営んでいるため、無料でリンゴ狩りをさせていただけるとお話があったので候補に入れた。焼き芋会は、季節に合った企画で秋を感じたいと考え候補に入れた。クリスマス会は、昨年の伊藤先生のゼミでケーキ作りをしたというお話を先輩から聞き、室内でできることと冬の一大イベントでもあるということで候補に入れた。この三つの候補から絞って企画することを決めた。リンゴ狩りは、台風19号の影響や交通手段の確保が難しかったことから断念した。焼き芋会は、大学内で火を使う場所の確保が難しいと判断し断念した。クリスマス会は、スポンジケーキやトッピングのお金がかかるものの、普段使っている教室で火を使わずにできるため、クリスマス会を実施することに至った。

ケーキ作りをするにあたり、ただ作るのではなくテーマを設けて審査員の先生をお呼びし、テーマに沿っているか評価していただくことにした。審査員の先生方は、実習演習室の比田井さんと白砂さん、教育支援課の宮崎さんに来ていただくことになった。テーマは、企画係で候補を3つ出した。

① 「高齢者の方に楽しんでもらえるケーキ」

→ベルポートまるこで実習した後だったた

め

② 「上田を表現したケーキ」

→長野大学に入学して約1年経過したため

③ 「クリスマス表現したケーキ」

→クリスマスシーズンだったため

上記の3つのテーマを候補に出し、クラスの人に多数決をとった。その結果、テーマは「クリスマス表現したケーキ」になった。

クリスマス会を実施するにあたり、スポンジケーキやホイップクリーム、トッピングにお金がかかるのでそのお金をどうするのかを考えることになった。伊藤先生に交渉し、スポンジケーキとホイップクリームのお金は伊藤先生のポケットマネーから出していただけることになった。トッピングはクラス一人一人が300円以内で買ってきてもらうことにした。その他必要なもの(包丁・スポンジケーキを乗せるお皿・クリームを塗るもの)は企画係で用意した。

クリスマス会当日の時間配分は次のように予定し進めた。

10:30~11:10 ケーキ作り

11:10~11:20 ケーキの説明

11:20~11:45 ケーキを食べる

11:45~12:00 審査&片付け

当日は予定通りに進行することができた。ケーキ作りをして食べた後、審査員の方に審査をしていただき、1班「匠の技、おばあちゃんありがとう賞」、2班「ラブリー映え賞」、3班「ドリーム

メルヘン賞」というように、それぞれの班に賞をいただいた。

後日、クラス全員から集めた感想用紙に下記の感想があった。

「一人一人が役割を持って協力することの大切さを感じることができた。」

「一人暮らしを始めて今年は大勢で楽しむことはないと思っていたが、このような企画をしてくれてとても嬉しかった。」

「あまり話したことがなかった人とも話すことができて良かった。」

「自分たちの班で工夫した点を評価してもらえて嬉しかった。」

「どの班が一番良いという評価方法ではなく、それぞれの班に賞がもらえて良かった。」

この感想から、皆で協力して楽しむことがいかに充実していて達成感を得ることができるのか改めて実感することができた。また、話したことがなかった人とも共同作業を通して仲を深めることができ、共に何かをすることは新たな関係を築くうえで大切であると考えた。

2. F19108 野川佳乃

2-1 グループ内の役割

私は、グループで決定したことをクラス全体に知らせるということをこのグループにおいて担当していた。直前に予定を言ってもみんなが参加するのは難しくなると思ったため、余裕をもって知らせていた。決まったことを知らせるときも口頭で伝えるだけでは伝わりにくいため、持ち物を伝えるときには黒板に書き出した。ラインのグループを使い、その日伝えたことをもう1度確認することもしていた。

また、準備の段階でもお金がかかる活動だっ

たため、事前に値段を調べて計算した金額を先生に伝え、お金を補助してもらうことにした。

値段は、見に行ける人に行ってもらって、決定した値段を先生に伝えることで補助してもらうことになったので、先生と予定を合わせてお昼の時間にお金を受け取りに行くことになった。買い物に行ってもらったので領収書を受け取って、それを表にまとめていなかったので手書きではあるがまとめて先生にお金をどのように使ったのかを報告した。

2-2 グループ活動を通して

私はグループ活動を通して、事前に当日の流れをイメージしてから準備することの重要性を学んだ。活動をする時間が1コマ分しかなかったため、時間配分をしっかりとおくことが必要だった。初めは、ケーキを作る時間と食べる時間、片付けの時間を考えて時間配分をしていたが、審査していただく時間や結果発表の時間を入れ忘れていた。また、審査員の方々に審査をお願いしたときに当日の時間配分を考えていなかったため、そのときに伝えた時間と決めた時間が違っていたため、当日に時間変更したことを伝えに行ってしまった。

また、準備をするものに関しても、大きな皿や包丁などを準備はしていたが、まな板を用意していなかったため当日に先生にまな板代わりのものを用意していただいた。このようなことから、直前に当日の予定や流れを決めるのではなく1週間前など余裕をもってその日のことをイメージしておくことで時間配分や何が必要なのかを考えやすいと思った。そうすることで、何かハプニングが起きたときに対処しやすいのではないかと考えた。

また、レクリエーションをするにあたって自

分も楽しむことも大切だと思った。ケーキを作るチームを作ったときに、私たちも各チームに1人ずつ入ることになった。私はチームに加わって一緒に作業をするのではなく、全体の流れを見ると思っていたのでサポートをするくらいにしか考えていなかった。しかし、同じグループの人に「せっかくだからみんなで楽しもう」と言われて、全員で楽しむことが大切だと気付いた。自分も一緒に楽しまなければ、その気持ちがみんなに伝わってしまうかもしれないと思った。そうすれば、せっかくのレクリエーションが全員で楽しめなくなってしまうと思う。自分も楽しむことがレクリエーションにおいて大切だということをこのグループ活動を通して学ぶことができた。

2-3 半年間の学びの概要

後期初めての活動は国際福祉機器展に参加したことだった。私は、主に喉頭ガンの治療などが原因で声が出なくなった人がもう1度声が出せるようになる機械ユアトーンについて調べて、見学してきた。他にも、同じグループの人と介護用の浴槽や車イスを見学した。クラスでの活動が始まり、役割分担があり私たちのグループは企画係になった。企画がメインではあるが、その他の活動もこのグループで行った。グループでの初めての活動として、無言館見学に行った。無言館では、戦争で亡くなった芸術家になっていたであろう方々の作品を見学した。グループでの初めての長期的な活動として、「ベルポートまるこ」での活動があった。初回は、施設にお邪魔しユニットで入所者の方々と交流しながら、次の実習への情報収集を行った。この活動で集めた情報をもとに、ユニットの方々なるべく多く参加してもらえよう活動を考えて。

実習当日は、施設の方に協力していただきながら、切り絵を行った。また、先輩方の基礎実習報告会を見学し、来年の実習のイメージができた。地域活動では、障害者が上田の観光地で健常者と同じように楽しめるのか検証した。私のグループは車イスに乗っている人の体験をし、坂道や狭い道などを通る時の大変さを学んだ。

このような後期での学びで1番印象に残っているのは、「ベルポートまるこ」での実習だ。自分たちはより多くの入居者の方が楽しんで活動ができるように、内容を考えていた。しかし、作業するときに施設の方に「音楽とかはないの？」と言われた。私たちの活動をやってもらうことばかり考えていて入居者の方々に楽しんで活動していただくことを考えていなかったと気付いた。クライアントのことを考えて行動するということが簡単ではないことをこの学習を通して、感じる事ができた。また、グループで活動することや外部の方々に協力を求めることを通じ、コミュニケーションの大切さを学んだ。自分から意思を伝え、行動しなければ何も物事は動いていかないと思った。自分の考えを持ちながら、クライアントと向き合っていくということがいかに難しいかを学ぶことができた活動だった。

2-4 半年間の学びの感想

私が伊藤クラスでの半年間の活動の中で学び得たことは、自分で考え行動することの大切さと、自分から学びに気付くスキルが必要だということだ。授業の進行や、それぞれの活動もできるだけ学生主体の進め方をしてくださったため、先生の助けを借りながらも自分たちで活動を進めることがほとんどだった。自分たちがしっかり用意しないと活動ができなかったため、やらなくてはいけないという責任感を持つこと

ができた。特に、自分たちのグループの役割であるレクリエーションのときにそう思った。これから、基礎実習などの活動では、指示を出されてからしか動けないのではなく自分から考えて行動していくことも大切になってくると思う。また、座学の授業のように学ぶことを提示されているのではなく、活動を通して自分から経験して気付いていくことでしか学べないこともあることに気付いた。現場でしか学べないことがあったので、ボランティアに多く参加し将来にむけて自分に力をつけていきたい。

3. F19145 吉田有咲

3-1 グループ内の役割

私は、企画のグループ活動において、クリスマス会の日程調整や、テーマ決めの呼びかけ、当日のケーキ作りの流れを伊藤ゼミナールのLINEグループで伝え、また各班のケーキのスポンジと生クリームの買い出しを担当した。スポンジは6号を3つと生クリームは白クリーム3本とチョコレート3本を購入した。

事前準備として、ケーキ作りの時間配分を決め、時間内に作業を終えて食べ終わり、片付けもできるように細かく時間設定をした。また、ゴミをなるべく出さないように各自で皿やフォークを持ってくるように指示をした。グループのリーダーとして、ケーキのデコレーションの材料を班員と決めて、材料費の調整をした。また、誰がどの材料を持ってくるかというのも指示を出した。

当日はケーキ作りを決めた時間内に終わらせるように指示したり、片付けも全員で行うように声をかけたりした。終了後にクリスマス会の感想を聞くため、全員に感想用紙を配布し、後

日回収した。

3-2 グループ活動を通して

私たちのグループは企画でゼミのみんなでクリスマス会をすることを提案し、実行した。この企画を行うにあたって、3人で企画内容や企画にかかる費用、日程調整について何回も話し合いをした。そこで思ったのは、自分たちだけでは何もできない、自分たちの考えだけでは上手くいかないということだった。クリスマス会をすることになってもなかなか日程を決められなかったり、どういう内容にするか案が思いつかなかったり、初めてのことに頭が回らなかった。しかし、伊藤先生の手助けやゼミの人たちの考えももらいながら企画の内容を作っていくことができた。

企画を考えただけの頃は、上手くできるのか、全員に楽しんでもらえるのか不安だった。そんな時でも、企画グループで自分たちなりにケーキ作りにテーマがあれば面白いとか、審査してもらうのも良いとか、考えを出し合って企画を盛り上げることができるように積極的に動いたり、意見を言ったりできて活動が楽しかった。

当日のクリスマス会では、決めた時間内でケーキを作り終え、片付けも全員で行うことができた。感想からは「楽しかった」「協力することができた」など、この企画を考えて実行することができて良かったと感じた。グループで活動をして、自分ひとりではないという安心感があったが、自分の任された役割に対する責任感はずごく感じた。その経験をすることができ、グループで協力し合い、考え合っこそ、成功することができるということを学んだ。また、相手の意見も尊重して自分の考えを通し過ぎずに

周りを見ながら行動したり、発言をしたりすることの大切さも学ぶことができた。

3-3 半年間の学びの概要

9/25 に国際福祉機器展の見学をした。実際に福祉機器に触れて体験したり、班員の人々が体験する姿を見て自分とは違った視点から観察して学んだりすることができた。同じ福祉機器の部類でも障害がある方一人ひとりに合わせた工夫がされていることが分かった。

初回授業での役割分担決めで私の班は企画を担当することになった。クラス全員の意見を聞きながらも、自分たちの考えたことや、やりたいことも取り入れて企画が行えるように話し合った。

10/9 に無言館ツアーに行った。館内には当時の画学生の作品があり、戦争の残酷さや国のために戦争に参加しなければいけないという苦しさが生徒の作品から感じられた。それとともに、今私たちが幸せに、大きな争いごともなく生活ができていることに感謝しなければならないと思った。「無言館」という名だからこそ、見に来た人たちに何か無言の訴えや思いが感じられた。

10/23 の午前にはベルポートまるこの事前学習を行い、午後から実際にベルポートまるこの施設にて館内の見学や実習を行った。事前学習では、特別養護老人ホームやデイサービスなど、施設の種類を学んだり、ユニットケアのしくみを知ったりすることができた。

10/30 に2年生の社会福祉基礎実習報告会に参加した。高齢者や障害者、幼児との関わりからの学びを伝えてくださり、来年私も先輩方のように実習を通して学びを深めて夢の実現の可能性を広げたいと思った。

11/20 にベルポートまるこにて企画の実施を

した。私たちの班は、利用者の方全員が楽しめるような企画をスタッフさんと検討した。企画内容は、折り紙でちぎり絵をすることと、クリスマスツリーの飾り作りをすることに決めた。企画実習では、スタッフさんを頼りながらも、利用者さんと素敵なクリスマスツリーを完成することができた。全員で協力し合い、一人ひとりに役割を与えることでやり終えた時の達成感を感じることができ、楽しんでいただくことができたと思う。

12/4 の地域活動では車いすで下半身麻痺を体験しながらグループで別所温泉を回った。私はガイドを担当し、名所の説明、案内をした。また私は車いすを押す役割でもあったため、体験者のことを考えながらブレーキを調節したり、段差のあるところでは手で持ち上げたりして工夫をした。別所温泉は坂道が多くて大変だったが、途中にある観光スポットや坂の上から見る景色がすごく良かったため、楽しみながら回ることができた。

地域活動の発表会では、改めて自分たちのグループの反省点を見つけたり、他の上田城の班の人たちの発表を聞いたりして、視覚障害者や聴覚障害者もそれぞれに体験してみて感じる困難さがあることが分かった。

3-4 半年間の学びの感想

後期に入って、この半年間では、実際に外に出て体験をしたり、自分たち自身で企画を考えたりなど、今までにないような経験をすることができ、学びを深めることができたと思う。高齢者支援施設での実習や地域活動、様々なグループ活動、活動後の意見共有、発表会を通して自分自身も成長することができ、ゼミの仲間の活動する姿、責任感のある行動に刺激をもらっ

たり、活動をする上で助けられたりして、短い期間ではあったが中身の濃い時間を過ごすことができた。また、ゼミの活動から、自分のずっと学びたかった福祉の分野に深く関わりを持つことができ、大変だな、難しいなと感じたときもあったが、この福祉に携わる活動ができたため、これからの経験に生かし、より深い学びにつなげていきたいと思った。もっと福祉に関わる活動に積極的に参加し、失敗を恐れずいろんなことに挑戦して視野を広げたい。

4. F19133 宮坂つぐみ

4-1 グループ内の役割

私の役割は主に二つだった。それぞれの班が作ったケーキを審査していただくにあたり、教育支援課の宮崎さん、実習演習室の比田井さんと白砂さんをお呼びすることになったのでそのことを伝え、来ていただくことができるかお聞きすることが私の役割の一つであった。三人の方には、12月18日に伊藤先生のクラスでケーキ作りをすること、その際にケーキの評価をしていただきたいこと、11時30分くらいに2-206の教室に来ていただきたいことを伝えた。

もう一つは、スポンジケーキとホイップクリームを伊藤先生のポケットマネーから出していただくことになったので、二つの値段の下調べをすることだった。ケーキ作りをする日の約1か月前にスーパーのザ・ビッグに行き、スポンジケーキ(税込み 407円)とホイップクリーム(税込み 203円)の値段を写真でとって、企画係のメンバーに伝えた。そして、三つの班でケーキを作るのでスポンジケーキを三つ、一つの班でホイップクリームを二つ使うと考えてホイップクリームは計6つ、合計2439円と伊藤先生に

伝えた。

4-2 グループ活動を通して

事前に宮崎さん、比田井さん、白砂さんに教室に来ていただく時間を伝えたが、当日に11時30分より20分早い11時10分に来ていただくように変更することになり、ご迷惑をおかけしてしまった。そのようなことがあり、早い段階で当日の時間配分を考えることの大切さを学んだ。また、下調べをするときにスポンジケーキの大きさのことを考えなかったため、後日ザ・ビッグに行ったときにスポンジケーキのサイズが3つあることに気づいた。以前調べたケーキのサイズを一番小さい5号だと思い、伊藤先生に連絡を取った。連絡をしてから以前撮った写真を確認すると、中くらいのサイズの6号であることに気づき、その旨を伊藤先生に伝えるために再度連絡をした。その件で伊藤先生にはご迷惑をおかけしてしまった。そのことで、自分でちゃんと確認すること、確認してから連絡を取ることの大切さを学んだ。スポンジケーキが三つあることに気づいたときに迅速に伊藤先生に相談することができた点は良かった。何か問題があったときはその後の対応にも影響が出てくるため、すぐに相談することが必要であると考えた。

当日に果物を切るためのまな板がないと伊藤先生に指摘を受け、伊藤先生がスケッチブックを用意してくださった。必要なものを事前に自分たちでよく考えなければならなかった。今回は、伊藤先生が臨機応変に対応してくださったが、急なアクシデントのときに迅速にどのような対応することができるか、自分で考えることの重要性を学ぶことができた。

班での活動を通して、個々の役割を明確にし

て実行することの大切を改めて感じる事ができた。誰かがやってくれるだろうと思って何もしないということがないように、それぞれに役割を与えることで責任を感じ行動することができたのだと考える。

4-3 半年間の学びの概要

国際福祉機器展では、浴槽を調べることに決めて見学した。介助する人目線で、介助しやすいように作られた浴槽や、実際に温泉に行くことができなくても自然を感じるができるように檜で作られた浴槽があった。介助者目線や、自分が動けないことを想定して、どのような製品が必要であるのか考えることが大切だと思った。

無言館での見学では、戦争の悲惨さをじかに感じた。戦争から生きて帰ってきたらパリに留学すると決めていた学生や描き途中の絵を仕上げると決めていた学生がいた。未来に希望を持った学生の夢が消えてしまうことに悲しさ、怒りを感じた。無言館では、その名の通り無言にならざるを得ない空間であった。未来を創造し、夢に向かって行動できることがとてもすごいことなのだ改めて考えることができた。

ベルポートまるこでの活動では、1回目の実習で挨拶をしてお話をした。しかし、あまり会話が続かなかったり、どのような話題を投げかけたりすればいいのかわからなかった。その結果、職員さんの手を借りてしまった。2回目の実習では、クリスマスツリーを作った。25分交代で貼り絵をするグループと折り紙を折るグループに分かれて作業する予定だったが、当日職員さんに折り紙は折れないと言われた。そのときにクリスマスツリーの飾りは見本で折ったのを使おうと臨機応変に対応することができて

良かった。また1回目の反省点を改善しようと臨んだが、2回目の実習でも職員さんの手をお借りしてしまい自分に行動力が足りないことを実感した。しかし、2回目の実習では、職員さんの行動を見て自分に取り入れることができた。実際に行動を見て、自分も取り入れることでその先の学びに繋がることや新たに気づくことがあるのだと考えた。

地域活動では、別所温泉において障害者の方になりきり、車いすでの活動を行った。普段の生活では気付かないような少しの段差でも車いすで生活している人にとっては障害であるということを知った。また、車いすでは通りづらい道などがあり、改善できる場所も多くあると感じた。その一方で、良い点もあった。それは、別所温泉の観光名所である北向観音に車いすでも通れるような道が整備されており、障害者の方も観光が楽しめるように配慮されているという点だ。障害者の方の立場に立って物事を考えて配慮していくことが重要であると考えた。

4-3 半年間の学びの感想

初めに、無言館見学を通して、戦争の儚さを痛感した。また、戦没画学生の素直な言葉からは生きていたいという強い想いを感じることができた。そして、絵画には声にならなかった数々の想いが込められていた。

ベルポートまるこ実習では、コミュニケーションをとることの難しさを感じ、その人に合った接し方を見つけていくことが大切だと感じた。また、自分たちが行ったレクリエーションで利用者さんが楽しんでくださって笑顔を見ることができて嬉しかった。

地域活動では、実際に車いすを使用することで新たな問題点や、障害者の方に対して地域が配慮している点にも気づくことができた。また、車いすでは近づくことができない場所や体験できないことがあり、そのときに一緒にいる人が障害者の方が楽しめるように工夫することも大切だと思った。

ザ・ビッグ塩田野店

(<https://www.aeon.com/store/>)

2019年度 人間と社会の理解Ⅱ（伊藤クラス）活動内容（写真集）



無言館



地域活動 上田城





地域活動 別所温泉



クリスマスケーキ作り

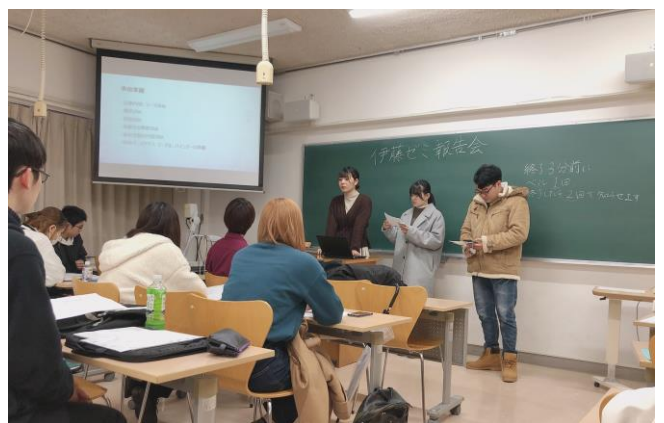




活動報告会 無言館係



活動報告会 ベルポートまるこ



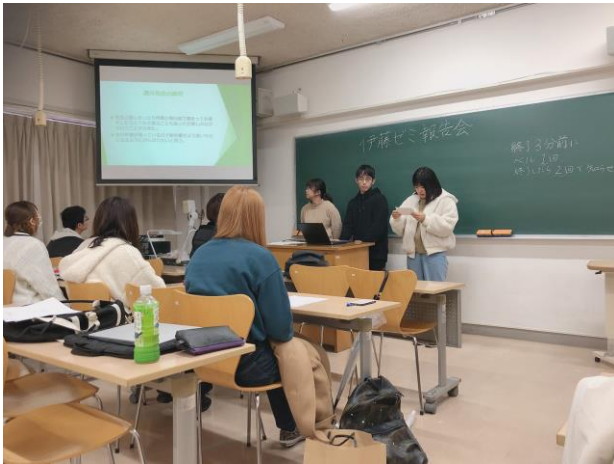
活動報告会 地域活動



活動報告会 企画係



活動報告会 進行係



活動報告会 報告会係



活動報告会 伊藤先生



普段の様子



長野大学社会福祉学部

人間と社会の理解Ⅱ伊藤クラス報告書

2020年1月15日発行

本件に関する問い合わせ先：

長野大学社会福祉学部社会福祉学科

伊藤英一（教授）

<http://www2.nagano.ac.jp/ito/>

